# バイオハザード？まぁんなタイトル聞き飽きたぁ～これからはゾンビが主役だぁぁぁぁぁ

亜差覇蚊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バイオハザード？まぁんなタイトル聞き飽きたぁ～これからはゾンビが主役だぁぁぁぁぁ

【Ｎコード】
Ｎ０１４７Ｒ

【作者名】
亜差覇蚊

【あらすじ】
こんにちはぁゾンビのケビンだよぉ
皆知ってる有名ゲームの［バイオハザード］今回はこれの裏話みたいなのやっていこう～～
ストーリーは視点代わるけど～
まぁゾンビ視点ってかわってると思うけど
まぁシリアスなんかするきないからぁ

楽しくパァッとねぇ

まぁストーリー自体は初期の［バイオハザード］館編でござぁ

では

どうぞぉ

## S．T．A．R．S…きやがったぁぁぁぁ（前書き）

なかなか楽しい設定かなって思いました

まぁ最初はまだまだな気がしますが、これからストーリーを進めながらコメディーにしていきますのでこれからよろしくです（＜＿＞）

**S・T・A・R・S…きやがったぁぁぁぁ**

あらすじからこんにちは～
え？ここはどこかって？

それはねぇラクーン市外アークレイ山中にある大きな館だよぉ
それで僕はねぇ
このゲームでの敵役のゾンビだよぉ～
名前はねぇケビンって言うんだよ

まぁケビンっていうのは生きてた時の話だけどねぇ

ってゆうかこれ読んでる人はこんな疑問抱いていないかい？

「何でゾンビがしゃべれるの？」

まぁわかりますよ～
作中じゃ知能がない
自我がないでしゃべれないんじゃないの？って
そりゃ作中の話ですよ
実際は少～し、ほんの少～しだけどぉ頭の片隅に自我ってのはあるんですよ

じゃなきゃ待ち伏せなんか出来ませんて（笑）
思い返してみてくださいよ

通路のど真ん中にぶっ倒れてて前を通ると足につかみ掛かってきたでしょ？

タンスの中からタイミングよく出てきたりしたでしょ？

ねぇ？そうじゃありません～？

まぁそんなんで僕らね…今まで脚光なんて浴びなかった…そんな日々ともおさらばだぁぁぁ！

これからはゾンビの時代だぁ

Ｙｅｓ．ゾンビ！Ｙｅｓ．ゾンビ！

さぁ今日はウェスカーさんに言われたから人が来るんだなぁ

確かスターズだっけ？

前にも何か同じようなの来たっけ～

まぁおもてなしの準備にかかりましょうかね

Ｓｉｄｅ　ＳＴＡＲＳ

「クリス！クリス」

ジルは入ってきたばかりのドアに向かう

「やめろ…ジル！今外に出るのは危険だ」

ウェスカーがジルを制止させる

「でも…クリスが……」

ジルが反抗した

その瞬間遠くで銃声が聞こえた

「銃声？」

「わからない…バリーと調べて来てくれるか？俺はここを確保しておく」

「わかったわ…行きましょうバリー」

ジルが扉に向かって走っていくのに従ってバリーがついていく

バリー達は大きな食堂のような場所に入った

「食堂…かしら？」

ジルはテーブルの上にあるものを見て推測する
そこに先に行って調べていたバリーがジルを呼んだ
ジルがそこへ行くとバリーは床を見ながら暗い顔をしていた

「どうしたの？バリー？」

「血だ…」

バリーが指についた血をジルに見えるようにした

「誰のかしら？」

「さぁな…クリスのじゃなきゃいいんだが……それよりその先を見てきてくれないか？」

バリーはすぐ目の前にあった扉を指差した

「わかったわ」

ジルは指示通りに見に行くことにした

Ｓｉｄｅ　ゾンビ

はい

こちらケビンだよぉ

ウェスカーさんから指示あったからとりあえず前に来た隊員を食べてるシーンやってみたいなだったからセットしたけど～

なかなかリアルだなぁ～

元が人間なだけに……

オロロロロロロロロロォ……

すいやせん…

吐いちまいました…ゴホっ

まぁ私はさっさと退散しますかねぇ

Ｓｉｄｅ　ＳＴＡＲＳ

ジルは扉を越えると左側の方からグチャグチャの音がしたので見に行った

「ケネス？！」

ジルが見たのは食われたのか変わり果てた仲間…ケネス・J・サリバンだった
それを食べているのは人の様だったが、ジルが声をあげると振り返りジルを見ると立ち上がった

ジルは少し下がるとベレッタを構えた

「モンスターめ」

ジルが引き金を引く
ジルが放った銃弾はモンスターの顎に命中し、頭蓋骨を一直線に打ち抜いた

ジルは倒したのを確認すると食堂に戻った

Ｓｉｄｅ　ゾンビ

「うわぁ～酷い」

さっきの光景を見ていたケビンはジルが去ったのと同時に出てきて死んだ同胞を見つめていた
そしてその仲間の横に崩れ落ちると泣きはじめた

「ごめんなぁごめんなぁ…俺がやってなんて言ったばっかりに……」

ケビンはひとしきり泣くと戻って行った

Ｓｉｄｅ　ＳＴＡＲＳ

「バリー！」

「ジル…どうした？」

ジルはバリーにさっきの事を報告した

「そうか…ケネスが…」

その時だった
ジルが帰ってきたドアが開き、モンスターが入ってきた

「バリー、あれはモンスターよ」

「わかった…俺に任せろ」

バリーは自身の腰からマグナムを取り出す
そして引き金を2、3度引きモンスターを殺す

「これは……ウェスカーに報告しに戻ろう」

そういうとバリーは走り出した
ジルも置いていかれまいとついていった

Ｓｉｄｅ　ゾンビ

バリーが仲間を撃ったシーンを2階から見つめていたケビン達はうろたえていた

「まずいよ…まずいよ……あいつら強いよ～どうするんだよ～ウェスカーさ～ん」

ケビンが叫び始める

「今…うろたえても仕方ないですよ…ケビンの兄貴」

「マックス…お前……」

ケビンはマックスに抱き着いた

「お前はやっぱり仲間だぁぁぁぁ」

二人?は泣きつづけた

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ

## S．T．A．R．S…きやがったぁぁぁぁ（後書き）

いかがでしたかぁ？

まぁケビンの絡みが謎ってのはあるかもですが
こんな感じにストーリーを本編に沿ってやっていこうと思ってます

では
感想やダメだし待ってますm（__）m

## お嬢が来たぁぁぁぁぁぁ（前書き）

は～い
どうもケビンで～す

はい
僕らのお話第二話だよ～
今回からケルちゃん解禁だよぉ～

可愛い可愛いケルちゃんだぁぁぁ

あはは
やめろって腕持ってくなってえぇぇぇ

**お嬢が来たぁぁぁぁぁぁ**

Ｓｉｄｅ　ＳＴＡＲＳ

ジルとバリーは最初のホールに戻ってきた
だがそこにはいるはずのウェスカーがいなかった

「ウェスカー？ウェスカー？」

バリーが呼び掛けるが応答はなかった

「ジル…少し捜そう。何か手掛かりがあるかもしれない」

「えぇわかったわ」

二人はそのホールを探し歩きはじめた
だが結局ウェスカーがどこへ行ったのかわからなくなった

「バリー…」

ジルは少し不安げに言った

「仕方ないな……そうだ、ホラ…キーピックだ。鍵開けの得意なお前がもっとけよ」

バリーは小さな針がねのような物を投げてよこした
キーピックと言うのは一種のピッキングツールのことだ

「ありがとう…バリー」

「いいんだ…俺はもう一度食堂の方を調べるからジルはそっちの方を頼む」

バリーが指差す方には青い扉があった

「了解…何かあったらここで」

「あぁ」

二人は拳と拳を軽く当てると二手に別れた

Ｓｉｄｅ　ジル

バリーと別れた私は、言われた青い扉を越えた
その部屋には真ん中に水瓶を持った女の像と奥に二つの入口がある部屋
それと…何故か脚立？

ジルは明らかに故意で置かれた脚立をまじまじと見つめる
そして脚立の高さを想定した場所を見ると
女の像の水瓶の中に何か丸めた物が入れられているのが見えた

「脚立はあれのため？」

ジルは不安に思いながらも脚立を水瓶の下に置く

脚立をセットし終えると、ジルは脚立を登りその丸められた物を手に取り広げた

「これって…ここの？」

ジルが手にしているのは地図だった
だがまだ場所を正確に把握出来ていないので本当にこの建物の地図なのかもわからない

「でも…あってるってこともあるわね」

ジルは地図を持って行くことにした

「さて…どっちに行けばいいんだろうか」

ジルは脚立から降りると迷っていた
奥の入口の前でだ

左の入口は吹き抜けでどちらかといえばこの部屋と繋がっている部屋

右の入口は扉があり、奥に進めるようになっているみたいだ

結果ジルは右の入口を選んだ

Ｓｉｄｅ　ゾンビ

はい…こんにちはぁ
私はケビンじゃないですよ～
ウィラって言います

私はですねぇ今お嬢さんが居た部屋の左の通路の角から監視する役です
これから仲間に報告ですよ

「こちら…［ａ－０２］、ウィラどうぞぉ」

ウィラは耳に付けたイヤホンマイクから仲間に連絡を回す

「報告します…お嬢は［ａ－０１］より右手…［ａ－０３］へと向かいました…どうぞ」

あっ、さっきから言ってる［ａなんたら］ってのは地区の事です
皆で分担してるんですよ

私がいるのはホールをＯとしたときに一階の右の扉を入った部屋が［ａ－０１］でその奥左が［ａ－０２］と言うことです

やぱ俺達頭いいなぁ～なんて
ではここからはケビンにＺｏｏｍ　ＩＮ！（笑）

はい、こちら［ａ－０３］地区ケビンです～
今私達は［ａ－０３］って言う館の外に面した通路の中ではなく外にいます（笑）
何してるかって？
そりゃぁ可愛い可愛いケルベロス（ゾンビ犬）ちゃんを行かせる準備してるんですよぉ～

ゲームじゃぁこの通路を通っているとですね
窓ガラスがガシャーンて割れてケルベロスちゃん登場！！みたいなですがね～裏っ側こんなんですよ…悲しいですねぇ

「おっとおっと、しっかり見てなくちゃなって…おいおいケルちゃん足食うなよ…おい～足、足ちぎれてるから～足～」

「おい、ケビン…馬鹿やってねぇで見ろ！見ろって」

「いや、怒られてもケルちゃんがぁぁぁ……［ａ－０３］第一ケルベロス行け」
ケビンがケルベロスの尻を叩くと、ケルベロスはケビンの足を思い切り食いちぎりながら走って行った

「ちょっ！！俺の足、足返してぇぇぇぇ～」

まぁそんなんでケルちゃん追っかけても匍匐前進だからなぁ
犬のスピードに追いつける訳無いじゃんかぁ～
な～んて言ってる間にケルちゃん勢い良く突入してったよぉ
俺の足加えたままで…

「きゃぁぁ、犬？」

「おぉ！ＳＴＡＲＳのお嬢、ケルちゃんにビビってやがるな……これは…勝機！！」

パァン　パァン……クゥゥン

「あれぇ～何の音だろうなぁ～悲鳴っぽいのも聞こえたんだけどな

ぁ」

ケビンはやっとついたケルベロスが飛び出して割れた窓から中を覗く

「ケルちゃんやぁ～」

にこやかに顔を出すとすぐ目の前で頭を撃ち抜かれたケルベロスが横たわっていた

「ケ～ル～ちゃぁぁぁぁん！！！！」

ケビンは全力で泣いた

「うぉぉぉぉ……ケルちゃぁぁぁぁぁん…こんなんなるんだったらもっと遊んでやればよかったぁぁぁぁぁぁぁ～あぁぁぁぁぁ」

ケビンはその場に泣き崩れていく

「ちくしょぉぉぉ」

その時、ケビンの肩を叩く者がいた

「お前のケルベロスも俺のケルベロスもよくやったよ」

「シルフ…お前」

「弔ってやろう…俺達のケルベロスを……」

二人は盛大に泣いた

Ｓｉｄｅ　ジル

「いきなり窓から犬が出てきてビックリしたなぁ～でも窓ってことは外側だから…」

ジルは地図を取り出して指でなぞる

「これがあのホールで…こういったから～ここか…ならこのままでいいのかな」

ジルは現在地を確認するとまた歩きだした

ケルベロスと戦った通路の先にあった扉を抜けると小さな通路に出た

ちょうど目の前にあった扉が気になったので中を調べることにした

「浴室？」

ジルが入ったのはこじんまりとした部屋で化粧台と人一人が入れるくらいのバスがあった

そのすぐ横に入る場所を見つけたのでついでに調べることにした

もちろん愛用のベレッタは構えたままだ

ジルは素早く入り込むとトイレにモンスターが座っていた

そして座っていたモンスターと目が合ってしまった

「え？あ……」

ジルの視線が自然と下に落ちていく

それと同時にベレッタを持つ手が引き上げられていく

「イヤァァァァァァ」

ジルは悲鳴を上げながらベレッタの引き金を何回も引いた

「ハァ…ハァ…」

ジルは羞恥の余りに息を切らせながらその部屋を出た

「何なのよ…あれ」

ジルは壁にもたれ掛かりながら息を整えた

Ｓｉｄｅ　ゾンビ

「こちら［ａ－０４］だ…どうした？［ａ－０６］どうした？応答しろ」

［ａ－０４］と言うのはジルが通路から入った小さな通路のエリアの事

［ａ－０６］は浴室のエリアの事だ

ん？［ａ－０５］がない？

あ～［ａ－０５］はね［ａ－０４］に入ったすぐ右の扉から外の

ボイラーに行けるんだけど…そこが［ａ－０５］まぁ来たところで何もないから警戒してないけどねぇ

「くそっ［ａ－０６］がやられた…」

そうしてふと顔を上げた瞬間ジルと目が合った

「あらぁ～こ・れ・は…ピ～ンチ……メーデー、メーデー、救援を要…ｓ……」

Ｓｉｄｅ　ジル

「何だろう…今の奴、妙に叫び回ってたような…」

ジルは目の前で倒れている死体を眺めながら思ったことを口にしていた

「まぁいいや…先行こう」

ジルは決心すると先に進みはじめた

ジルが次に入った部屋はさっき倒したゾンビの後ろにあった扉の先だった

「何にもないけど…扉がある」

ジルは入ってきた扉を閉じると右斜め前にもう一つの扉を見つけ

るがそれ以外は何もない部屋だった

「とにかく…あの扉の奥も調べよう」

ジルはその扉に手をかけた

Ｓｉｄｅ　ゾンビ

「こちら［ａ－０８］担当クラウスです…お嬢［ａ－０７］抜けこちらにきたもよう」

クラウスがいるのはジルが入ろうとした部屋の隠し部屋のようなところ

「お嬢を目視で確認しましたぁ……罠起動しときます」

クラウスは手元のコントロールパネルのボタンを押した

「これでいいですね」

Ｓｉｄｅ　ジル

「ここはなんだろ？待合室かな？」

ジルが入った部屋には真ん中に大きな机があり、ソファーも備えられた部屋だった

その奥にラックに掛けられた何かが目に入った

「あれは？…なんだろ」

ジルはテーブルを避けてそれを調べに行く

「これは…ショットガン？」

ジルはそれをラックから取る
その瞬間ラックが上に持ち上がった
だがジルはそれに気づかなかった

「ショットガンか…借りて行こうかな。弾も入ってるみたいだし」

ジルはそれ以外に気になるところがないと思うと部屋を出て扉を閉めた

「ふん…何もなかったか」

ガコンッ

何かが作動する音が聞こえたジルは驚いた

「何？……もしかして天井が…下がってきてる？」

ジルは壁を見つめていると砂がザラザラと降ってきているのを見ると天井と壁が擦れて破片が落ちてきているということになる

「早く出なくちゃ」

ジルは元々入ってきた扉に詰め寄った

「開かない…どうして？」

ジルは扉を叩く
だが扉はびくともせず天井だけが落ちて来ている

「誰か！誰か助けて！」

「ジル？そこにいるのはジルか？」

何と助けに来たのはバリーだった

「えぇ…扉が開かないの。助けてバリー」

「わかった…扉を蹴破るから退け」

「わかったわ」

ジルは扉の前からどくとすぐにバリーが扉を蹴る音がし始めた
そして3度目の蹴りと同時に扉の鍵が壊れて開いた

「ジル早く」

ジルはバリーの元へ走った

「助かったわバリー」

「よかったな…危うくサンドイッチになるところだったな」

「ふふ…そうね」

「じゃぁ俺は戻るからな」

「ありがとう…バリー」

そうして二人は別れた

Ｓｉｄｅ　ゾンビ

「くそ…こちら［ａ－０７］だ。罠はもう一人の男に助けられ失敗した」

俺の名前はマインだ

この［ａ－０７］担当だ

「さて…出るか」

マインは扉に手をかける

そして扉を引くと目の前は真っ白のコンクリートだった

「あれ？…何で？コンクリート？」

マインはこの部屋と［ａ－０７］の構造を考えた

［ａ－０７］の部屋の一角にある外からはほとんど見えない場所にある扉の奥がこの部屋

「まずい…非常にま～ずい……これって…出られないってことじゃん」

マインは今置かれてる絶望的状況にうろたえた

「これじゃ…このまま飢え死に……ってもう死んでるか（笑）」

マインは諦めてむしろ開き直ることにしたのだった

Ｓｉｄｅ　ジル

ジルはすぐ向いにあった扉に入るとやはりモンスターがいた

ジルは迷う事なくベレッタの引き金を引く

「もぅ慣れてきたわね…」

ジルはその通路には三つのドアと奥に右に曲がる道を見つけた

「えっと～地図で見ると～ここか……なら、この扉の先が階段で～こっちの扉の先は行き止まりでぇ～この先のやつは何だろ？何か中で折り返してる……まぁいいか近いのから順番に行こう」

ジルは一番手前にある青い扉を開けた

「前に進むと階段があるのか」

ジルは構えたベレッタを下ろさずに奥に進んで行く

すると案の定階段のすぐ下に一匹居て迫ってきた

ジルはもう何も迷わずに頭を撃ち抜く

「ふぅ…この奥の部屋も調べとこうかしら」

ジルはベレッタを下ろすと階段下にある部屋の扉に手を掛けた

「え？あれ？…お邪魔しましたぁ」

ジルはすぐに扉を閉じた

「何？何あれ？何でトランプなんてやってるの？」

ジルはもう一度扉を開けて中を覗く

すると三匹居たモンスター全員と目があったし、何か片手上げてうめきながら挨拶してきたし

「あはは…失礼しましたぁ」

ジルは扉を閉じ、壁に背中を預けるとショットガンを構えた

そしてふぅと一息つくとショットガンシェルを弾き出しリロードする

そして一気に扉を開けると有無を言わさずにショットガンを乱射した

Ｓｉｄｅ　ゾンビ

ここは休憩室で今僕らはポーカーやってるんだぁ

でもさっきから扉の向こううるさいんだよねぇ

「あれ？何か音がするなぁ」

ガチャッ

そこに居たゾンビ達三人は一斉に扉を見る

そこには僕らを見て唖然とするお嬢

「あっどうもお嬢」

とりあえず挨拶しとくかぁ

「ありゃ？お嬢帰って行ったよ？」

「どうしたんだろうねぇ」

「まぁいいんじゃない？それより続きやろ」

「そうだなぁ」

ガチャ

扉が開く音がしたので、やっぱり三人一斉に見る

「あれ？お嬢また来たよ？」

「すぐ出てったね～」

「どうしたんだろうねぇ～あははぁ…あっ俺やばい…奇跡起こすかもロイヤルストレー……」

言おうとした瞬間扉が勢いよく開かれた

「何だ！何だぁ！」

扉の方を見るとショットガンを構えたお嬢が…

「逃げろぉぉぉぉぉ～まぁ袋小路だから無理かぁ～テヘッ☆ギャァァァァ」

Ｓｉｄｅ　ジル

「ふぅ…ここで少し休憩しましょうか…」

ジルは穴だらけになったモンスターを部屋の外に放り出すとその部屋で休憩を取ることにした

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ

## お嬢が来たぁぁぁぁぁぁ（後書き）

いかがでしたか？

夢路様よりわかりにくいと言われたのですがね…

何せゲームの攻略チャートみたいなのをコメディー化したものだから原作知らないとわかりにくいという結論に至りました（＜＿＞）

もしわかりにくいとかありましたら感想あたりにでも下さいｍ（＿）ｍ

## ハプニングって事故じゃないんですかぁ？（前書き）

どうも　ケビンです
前回ケルちゃんに足食いちぎられたんですがまだまだ現役ですよ
ちなみに今回から話に書く内容をあらかじめ前書きに書いていこうかと
なにぶんバイオハザードのゲームをやったことがないっていう方のために少し説明があった方がわかりやすいかなと思いましたので…
今作品は館から寄宿舎、寄宿舎から館に少し帰って来て地下道を抜けて研究所を攻略するというシナリオになってます
これは初期のバイオハザードやＤＳのデッドリーサイレンスと同じです
で…今は館から寄宿舎に行く話ですが四つのメダルをはめることで寄宿舎に行くことが出来るのですが…今回はその内の一つが出ます
まだまだ館編は続きますよ
何せあと三つもありますしね
ではどうぞぉ

**ハプニングって事故じゃないんですかぁ？**

Ｓｉｄｅ　ジル

「さて…じゃぁ何があるかわかんないけど…この回りの部屋見ていきますか」

ジルは休憩室から出ると地図を見ながら前の通路に出る扉へ向かっていた

「取りあえずはここの横と…その向かいの部屋かな」

ジルは扉を出ると敵が居ない事を確認して通路を歩きだした

「まずは…ここ…」

ジルは階段に繋がる部屋の入口のすぐ隣にある扉に手をかけた

「あれ…開かない？鍵がかかってるのかな…」

ジルは少し扉を調べていると鍵穴の上に冠の様なマークが掘られていることに気づいた

「冠の鍵？…ってことかな」

ジルは合ってるのか？という疑問にさいなまれながらも結論づけた

「仕方ない…あっち調べるかぁ」

ジルはくるっと振り返り斜め向かいにある扉に向かった

ジルはその扉を開けると異様な鳴き声に気を取られた

「この鳴き声は…カラス？」

ジルが見たのは部屋の壁に設置された証明器具の上で鳴き声を上げるカラスだった

だが特に襲い掛かってくる様子もなかったので刺激しないように静かに中に入った

「ここは…展示室かしら？絵が飾ってあるし」

ジルは入口に入って1番最初に目についた絵に近寄る

「綺麗な絵……［生命］って言うんだぁ」

ジルは隣の絵も見はじめた

「これは…何だろう？オッサン？ってかわざわざオッサンなんか描く？」

ジルが二枚目に見たのは見るからに中年臭いオッサンだった

一升瓶を右手にツマミを左手に持ったオッサンの絵だった

「何かあれね…個性が現れてるような」

ジルはその隣の絵も見る

「うわぁ～可愛い子」

次に描いてあったのは女性に抱かれた小さな赤ちゃんだった

「さっきのと違って何か～いいなぁ…」

ジルは名残惜しそうに裏へと回った

「後あるのが壁に3枚と1番奥の壁に1枚か」

ジルは曲がった最初の絵を見る

「この人…カッコイイなぁ…」

ジルは絵に見とれながら赤くなる

絵に描かれているのはスーツに見を包んだリーマンスタイルの男性だった

「でも…何だろう……何かが引っ掛かるのよねぇ～」

ジルは仕方がなく残りも調べることにした

「うわ…何？この嫌な絵は？」

ジルが次に見たのは少年達が一人の女の子の周りに集まって何かをしている絵だった

ただその絵の女の子は泣いているのか俯いたまましゃがみ込んでいた

「何か…シビアねぇ」

ジルは最後から二つ目の絵に差し掛かった

「あれ？この絵だけ額縁が豪華なような」

それには元気そうな…ってか見るからに元気なおじいちゃんが描かれていた

「何故に鉄棒で大車輪してる絵？しかも…この歳で片手大車輪はないだろ…腕抜けるわよ」

そこでジルはあることに気がついた

「最初にあった絵のタイトルは［生命］…それから見たのは……全部、成長過程の絵だった」

ジルは取りあえず最後の絵を調べることにした

「タイトルは［生命の終わり］…やっぱり」

ジルは納得した
これは謎解きなんだと

最初に見たのは［生命］という絵
1番最後に見たのは［生命の終わり］だった
ならその間にくるのは
成長過程の絵だ

ジルはもう一度先程の5枚の絵を調べた

「やっぱり」

ジルは調べているとネームプレートの下にボタンがあるのを見つけた

「これを赤ちゃんから順番に押していけば……」

ジルは赤ちゃんの絵、イジメ少年の絵、カッコイイ青年の絵、飲んだくれのオッサンの絵、大車輪してるおじいちゃんの絵の順番にボタンを押して行った

「後は……あの絵のボタンね」

ジルは1番奥にある［生命の終わり］の前に立ち、同じ様にボタンを押した

するとその絵はガチャリと音を立てて床に落ちた

その中に金色に光る丸い物が置いてあった

「これ……メダルかな？」

ジルはそれをまじまじと見つめるがメダル状の手の平サイズで真ん中に太陽の様な模様が掘られている以外に何にもなかった

「でも……隠されてるってことは重要なメダルなんだ…よね？」

ジルはウエストポーチにそれを入れた

その瞬間、ジルの後ろの方で爆竹のような音がした

「何？何があったの？」

ジルは突然の出来事に戸惑った

そして次の瞬間さっきまで普通に鳴いていたカラスが音に驚いて飛び回りだし、ジルを狙ってきた

「きゃぁ…痛い、痛い…やめ……」

ジルは体の周りに取り付くカラスを手で払いながら入口へと走って戻った

「ふぅ…危うく穴だらけになるとこだったわ……ってか誰よ爆竹なんか投げ込んだの」

ジルは怒りながらも捜索を続けた

Ｓｉｄｅ　ゾンビ

「こんちゃーす。ケビンです～お嬢がカラスの部屋に行ったっていう報告もらったから来てみたよ～」

ケビンはジルが絵の部屋に入ってすぐに来たのだった

「うんうん…足音するから居るんだね～なら僕が用意したこの爆竹で！」

ケビンは胸元のポケットから爆竹を一つ取り出した

「これを投げ込むのはいいとしてぇ…逃げれるかな～？（汗）」

ケビンは爆竹と睨めっこを続けた

「まぁ逃げれなかったらそん時だよねぇ～あはは～～ん～どうしたんだい？皆？……うん？僕の足？」

ケビンは自分の足を見る

「足がどうかした？……あぁ～前にケルちゃんに食いちぎられたじゃんって？そんなことはノープログレム！」

ケビンが皆には表情のわからない顔でニヤッとした

「このゲームじゃ知らない間にゾンビが復活してたぁなんてシーンいくらでもあるじゃんか」

ケビンは同意を求めるように手を広げて言った

「まぁそんなことは気にせずに行こう～」

そしてケビンは少し扉を開けると爆竹を放り込み一目散に逃げ出す

「こちら［ａ－１３］絵の部屋に爆竹投入完了…ただちに戦線離脱します」

ケビンは全力で手前の部屋［ａ－０４］へ走った

心地よく響くジルの叫び声を聞きながら

Ｓｉｄｅ　ジル

「ふぅ…さっきは酷い目にあったけど…こっち半分はもう終わりかな」

ジルは地図を広げながら見た所にチェックを入れていく

「よし次は２階を調べてから…食堂の方にでも行こうかしらね」

ジルは地図を折りたたみウエストポーチに入れると階段があった部屋に足を運んだ

Ｓｉｄｅ　ゾンビ

「どうも…私はジョンって言います～知ってる人は知っているジョンですよ～～エイダの恋人だったジョンですよ～～はい…私がいるのは［ｃ－０７］です～ちょうど１階の階段がある場所［ａ－１０］の真上ですね……報告を受けて１階を見張っています……あっ待ち人来ましたねぇ～私ともう二人（一人気づくかなぁ～奥にいるしなぁ（笑））はここでやられちゃて～みたいなキャラなのでこれで失礼…」

Ｓｉｄｅ　ジル

私は階段の下に辿りつくと上を見上げた

「うわっ…目合っちゃったよ…」

ジルが目を上げるとしっかりとモンスターと目が合ってしまった

「ここからじゃ当たらないだろうしなぁ」

ジルは一度ベレッタを構えた

その瞬間モンスターは慌てて見を翻し奥に入って行った

「あれ？…まぁいいや…行こ」

ジルは意を決して階段を登る

2階にたどり着くと左側から一匹のモンスターがジルを捕獲するように手を前に突き出しながら歩いてきた

ジルは一瞬だが反応が遅れ、モンスターの接近を許してしまった

「まずった……ふぇっ？！」

ジルが阿呆のような声を上げた

モンスターの突き出した手がちょうどジルの胸を触っていたのだ

ジルは平手打ちでモンスターの両手を叩き落とすと、モンスターの顎目掛けて裏拳を叩き込んだ

モンスターの頭が首から綺麗に外れ壁にぶちあたり脳みそやらをぶちまける

「ふぅ〜ふぅ〜……」

ジルはまたまた羞恥の余りに我を忘れた行動を取ってしまった

ジルはもうどうしようもないと振り返るともう一匹が迫っていた

「何よ…あんたも殺されたいの？」

ジルの剣幕に気圧されたのかモンスターは首を数回左右に振ると道を譲るように壁に寄り掛かった

「ありがとう…」

ジルはその前を通りすぎ、角を曲がり奥の扉を開けた

Ｓｉｄｅ　ゾンビ

「どうも…ジョンです……何ですか？あのお嬢…思わず道譲っちゃいましたよ～（汗）」

ジョンは階段のすぐ横で頭を裏拳で吹っ飛ばされて動かなくなった同胞を見つめていた

「なぁ…ちょい悪いんだけどさ～お嬢の胸の感触どうだった？」

ジョンが問い掛けると今まで動かなかった死体は右手を少しだけ持ち上げると、親指だけを立ててグッドサインを作った

「そうか…ありがとう……そして…よかったな」

ジョンはすっと立ち上がる

それに伴い死体はバイバイと手を振る

それを見届けるとジョンは歩きだした

To be continue

## ハプニングって事故じゃないんですかぁ？（後書き）

どうでしたか？

二話より多少短いですが前書きに説明を書き出すと余りたくさん書けないっていう事故…

まぁそれでも頑張っていくにきまってるじゃないですかぁ～

だから楽しみにしててくださいね（＜＿＞）

ｂｙ　ケビン

## フォレストさん…いっくよぉぉぉぉぉ（前書き）

ども

今回はですね
最初に入るホールを2階にあがって右側の二つ扉がある場所の話ですね

最初ジルは2階の通路からホールに出て、バルコニーに行くという話です

バルコニーはゲーム進行上最悪行かなくても構わない部屋なのですがね…
仲間が出ますしね

はいってなわけで
どうぞぉ

**フォレストさん…いっくよぉぉぉぉぉ**

Ｓｉｄｅ　ジル

「何なのよあいつ……いきなり胸何か触るから…キレちゃったじゃない」

ジルはぶつぶつと文句を言いながら奥の扉を開けた

「すぐ目の前に一匹と…奥に曲がり角ね」

ジルは開けた扉からその中の通路の様子を見る
中は赤い壁に囲まれた部屋でまっすぐの通路のど真ん中にジルが開けた扉がある

「まずあいつを倒して奥の捜索」

ジルは勢いよく扉を開くとベレッタを引き抜き扉から見えていたモンスターを容赦なく撃ち抜く

「よし…」

ジルはモンスターが倒れたのを確認すると曲がり角の方へと歩きだした

そしてモンスターの目の前についた時だった

モンスターはガバッとジルの足に抱き着いた

「きゃぁ何？こいつ死んでなかったの？」

ジルは揺すぶられながらベレッタを引き抜くとモンスターの頭を撃ち抜いた

Ｓｉｄｅ　ゾンビ

「お嬢があの扉から見てるなぁ」

通路の目の前にいた俺、ジャックはそんな感想を述べていた

「さぁていっちょお嬢捕まえて手柄あげますかぁ」

ジャックが少し体をそちらに向けた時扉が音を立てて開いた

「おや？」

ジャックは少し驚き現状分析が出来ないでいた

だがやっと現状分析出来た時にはジルはジャック目掛けてベレッタを構えていた

「おぅ…お嬢…容赦ねぇや～じゃぁな皆後は頼んだぜ」

ジャックは潔く手を広げた

そして三発の銃弾がジャックの体を撃ち抜いた

「グフッ……」

ジャックはその場に崩れ落ちた
自分の前方から足音だけが聞こえてくる
「せめて…死ぬ前にやったるぁぁぁぁ！！」
ジャックの目の前に足音が来た時、ジャックは出来る精一杯の動きでジルの足にしがみついた
「よっしゃぁぁお嬢とったりぃ～」
ジャックは喜びのあまりにジルの顔を見た
その顔は狂気に満ちていた
「あらぁ～悪魔だね～」
ジャックが見たのは顔を伏せながら銃を向けるお嬢
「じゃぁ本当にさよならだ……じゃあな皆ＧＯＯＤ　Ｒａｃｋ」

Ｓｉｄｅ　ジル

「何でだろう…教われ方が一々やらしいような…気のせいかな」
ジルは今のモンスターから血が流れ出ているのを確認すると曲がり角を曲がった
「この扉はなんだろ？」

曲がり角を曲がってすぐ右の壁のど真ん中にある扉を見つけた

「頑丈そうな扉ね…」

ジルは少しその扉を調べた
すると鍵がかかっているのか開かない

「これは……鎧の模様？かな」

ジルは冠と同じような種類の鍵の存在を悟った

「うん…仕方ないし……この奥の曲がり角をしらべようかな」

ジルは更に奥の曲がり角に身を寄せると、その先に向かって少しだけ顔をだした

「左側の壁に扉が一つとその前辺りにモンスターが一匹…で、1番奥に扉が一つか」

ジルはベレッタを抜くと肩の力を抜いた
そして壁からくるっと出るとベレッタの銃口をモンスターに向けた
そして3回トリガーを引くとモンスターは崩れ落ちた

「もうさっきみたいにはならないから」

ジルは少し距離を詰めるとベレッタで留めに2発銃弾を撃ち込んだ

「っと…この部屋はっと……また鍵閉まってるし…これも鎧だ…」

ジルは落胆したように肩を落とすが、鍵が先程調べた扉と同じものが必要となることがわかると少しだけ気分が楽になった

「まぁいいわ…確か1番奥の部屋はホールの2階に出るんだったよね…」

ジルは地図を取り出し確認する

「とりあえずホールに出ようかな…そういえばこの部屋」

ジルはホールに出る扉の横にもうひとつ部屋があるのを見つけた

「ここも調べないといけないな」

ジルは扉を開けた

「バリー？」

ホールに出たジルは偶然にもバリーと再会した

「ジルか…そっちはどうだった？」

「一応…こんなメダルみたいなのを見つけたわ」

ジルは太陽の絵が彫られたメダルをバリーに見せた

「こんなものがあるのか……そうか…引き続き調査を頼みたいんだが…あの部屋は見たか？」

バリーが指したのはジルも今から行こうとした部屋の扉だった

「ううん…私も今から行こうとしてた所」

「そうか…なら一緒に行こう」

Ｓｉｄｅ　ゾンビ

「こんにちは…ケビンです……今回はちょっと心強い味方が居てます……うんと確かぁ前に来たチームの一人で…フォレストさん…だっけ？」

ケビンはくるっと振り返った

そこには青いジャケットを羽織った長髪のゾンビが立っていた

「あっ…どうもブラヴォーチームで火器専門で扱ってたフォレストです…」

フォレストは一度会釈した

「で…今僕たちは2階に上がって右側［ａ－］とか［ｃ－］に当たる方のバルコニーみたいなとこでクロウ（カラス）に餌やってるんですよ…まぁ自分の体の肉なんですけどね…なかなか痛いや」

「ケビンさんはまだ慣れてないんですね？僕は慣れきっちゃって」

フォレストはケビンと違い体中をクロウに啄まれていた

「ちょっフォレストさん？大丈夫？ねぇ？大丈夫？」

「平気ですよ～」

そんな時だった

このバルコニーに続く廊下の方から扉の開く音がした

「来ましたよ…ケビンさん」

「よし…ならフォレストさん任せました…」

そう言い残すとケビンはバルコニーの一角に置いてあった椅子を運び、手摺りの傍に置いた

そしてその椅子を踏み台に屋根に登って行く

「じゃぁよろしくです」

そしてそこからは物音ひとつ聞こえなかった

「僕も用意するかな」

フォレストはバルコニーの壁づたいにある少し突き出た場所に座り込む

「にしても……あのガリガリな腕でよく体支えられたな」

フォレストは感心しながら疑問を抱いていた

Ｓｉｄｅ　ＳＴＡＲＳ

「準備はいいな？ジル」

バリーが扉に手をかけてジルに向き直った

「えぇ…」

ジルは一度ベレッタを構えなおした

「よし…行くぞ」

バリーは言うと同時に扉を開けた

「なんだ？バルコニーか？」

バリーは入った場所がバルコニーであるのに気づくのにさほど時間はかからなかった

「バリー…あれ」

ジルは奥を見て指差した

「何だ？」

バリーもその指先を辿って目を向けていく

「フォレスト！！」

バリーは走った

「なんてこった…フォレストが…」

バリーはフォレストの死体を調べながら床を叩いた

「フォレストが……」

その時だった
フォレストの死体は立ち上がった

「フォレ…スト？」

バリーはフォレストを見上げる形になった
そしてフォレストはバリーの肩を掴むと顔を近づけていった

「やめろ…フォレスト！！」

バリーは必死に抵抗する

「バリー…伏せて」

ジルが叫ぶ
バリーは言われたとおりに身を小さくするとフォレストの上半身はがら空きになった

「ごめん……フォレスト」

ジルはトリガーを引いた
その銃弾はフォレストの頭を綺麗に撃ち抜いた

フォレストはその場に倒れ伏した
そしてフォレストの頭からは血が流れ出てきた
「ジル…」
身を上げたバリーはジルを見た
「うぅ……」
ジルは仲間を殺した罪悪感に押し潰されそうになっていた
「ジル…こっちへこい」
バリーがジルに手招きする
ジルは涙を拭いながらバリーの元へ歩いていった
「ジル…大丈夫だ……フォレストのやつ、これでやっと成仏出来るんだからな」
バリーはジルの頭をポンポンと慰めるように叩きながら言った
「だから…泣くな、ジル」
「うん…ありがとう、バリー」
少し落ち着いたのかジルは泣き止んでいた

Ｓｉｄｅ　フォレスト

「（おったまげたな…まさか来てる奴がバリーとジルだったのか）」

フォレストはバルコニーに出向いた見知った顔を見て驚いていた

「（そうか…あいつらだったのか……おっ来た来た）」

フォレストは目を見遣るとちょうどジルが指差しているところだった

「（おっバリーが来たか）」

フォレストの前にバリーが片膝をついた

「（少しばっか脅かしてやるか）」

バリーはフォレストが生きてることに気づかずに床を悔しそうに叩いている

「今だ」

フォレストはぐっと立ち上がるとバリーにつかみ掛かった

「俺だぞバリー…バリー！！」

フォレストは自分だと言うことをアピールしまくった

その時だった

「バリー…伏せて」

「え？」

フォレストはふと声のした方を見た

「ちょっ？マジで？」

「ごめん…フォレスト」

「泣くなよ…ジル……ってか俺ってわかってるなら撃つなよ！！っても俺らの声なんか呻いてるようにしか聞こえねぇしなぁ～」

そのすぐ後に頭を撃ち抜かれる感触がして…

意識は遠退いていった

Ｓｉｄｅ　ＳＴＡＲＳ

「フォレストまで…やられたか……」

バリーが深刻な顔をして言った

「えぇ…ケネスもだったし……エンリコやリチャードにレベッカは大丈夫かしら……」

ジルはすぐに仲間の安否が不安になりだした

二人はホールに出た

「ジル…すまないな…」

「何でバリーが謝るの？」

「……いや…何か嫌なもん見せちまったかなってな」

バリーは申し訳なさそうに頭をかいた

「大丈夫よ…私は大丈夫……次私は食堂の方を見に行くよ」

「そうか……わかった…俺はもう少し色んな所を調べる」

バリーとジルは入れ違うように反対の扉に向かって行った

「そうだ…ジル」

バリーが急にジルを呼び止めた

「どうしたの？バリー」

「これを持って行け…フォレストの物だが使ってやってくれ」

バリーは一丁の銃をジルに差し出した

「これ…グレネードガン」

ジルはもらった銃を見つめて言った

それはフォレストが使っていたグレネードガン

「…あぁ…さっきな」

「そう…ありがとう、バリー」

「あぁ…じゃあな」

バリーは片手を上げると向いの部屋に入って行った

「ありがとう……バリー、フォレスト」

ジルも食堂の2階の方へ向かった

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ

**フォレストさん…いっくよぉぉぉぉぉ（後書き）**

どうでしたかね

仲間のフォレストさん
ブラヴォーチームはエンリコ隊長を筆頭にリチャード、ケネス、フォレスト、レベッカの五人で構成さるたＳ．Ｔ．Ａ．Ｒ．Ｓ．の正式な仲間です

この中で既に二名が死んでます
ちなみにレベッカはジルのストーリーでは出ないのですが…出してほしいという要望がありましたら…考えますｆ＾｜＾；

さぁ後の二名は無事なのか……

**ちょ…お嬢……いい奴やんけぇぇぇぇ！（前書き）**

どうもケビンです……遅くなってすんませんm（__）m

作者が今後の確認のためにバイオハザードやってたみたいで

はい…今回は食堂の上って言う舞台ですが

正直ゲームでもここは二体のゾンビと石像しかありません

石像を落としたら青い宝石と言うアイテムを入手しますが、使用用途はまだ伏せておきます

作者いわく、少し感動を加えてみましたので

よければ楽しんだってください

だそうです

ではどうぞぉ

**ちょ…お嬢……いい奴やんけぇぇぇぇ！**

Ｓｉｄｅ　ジル

どうもＳ．Ｔ．Ａ．Ｒ．Ｓ．のジル・バレンタインです
私はバリーと別れた後、まぁ今何ですが…食堂の２階に来てるんですが……

ここに入った瞬間に二人いたモンスターが全力で逃げていった気がするんですが……

逃げたいのこっちよ…
ハァ…

まぁ行くしかないし…ね

「とりあえずはダッシュして頭狙える距離まで詰める」

食堂の２階は壁側から人が三人くらい通れる通路がぐるっと一周した、真ん中が吹き抜けの構造になっている

ジルは扉を背に右の通路に走った

Ｓｉｄｅ　ゾンビ

はい、どうも…食堂の２階は私達二人で見とけってウェスカーさんに言われたんですけど……
相棒は反対側にいるから暇で暇で……

ピリリリリ

「ん？通信かな？こちら［ｄ－０１］どうぞ」

「ケビンです～［０］から［ｄ－０１］にお嬢進行するっすよ」

「逃げていいの？」

「え？…いや…あの……出来たら…逃げない…で？」

通信機越しのケビンが慌てているのがわかる

「来たみたいなんで…さよなら（笑）」

「え？ちょっ…」

ブッ…ツーツーツー
通信機を切った

「さてお嬢はどんなかなぁ～……あぁ既に得物構えてらっしゃる」

とりあえず向かいの奴に逃げる合図するか
私は廊下の手摺りを二回叩いた
これが向かいの奴との合図だ

例によって向かいの奴は気づいた
私は手を振り上げ奥の方へと手を煽ると、奴は察したのかその方へ走り出した
私もその方向に走り出す

そして奥に着く直前に後ろを振り返ると……

「いたんだよねぇ～これが……皆、俺は先に逝ってるぜ…」

まず一発目の銃声
それは綺麗に私の脳天を撃ち抜く
それを見た向かいの奴は俺に覆いかぶさるように泣きついてきた

「お前…早く逃げ…ろ」

私は最後の力を振り絞りそいつを引き離そうとする
だがそいつは一切離れようとせずに泣きつく

私はふとお嬢の方を見た
もしかしたら情が移ったかもと微かな期待を寄せて

「まぁ…武器下ろす訳無いかぁ～」

二発目の銃声が聞こえた
それは目の前の奴の頭を撃ち抜いた
そして力無く覆いかぶさってくる

「お前……」

私は何故かそいつが可哀相になり抱きしめた
泣きながら抱きしめた
またふとお嬢を見た
今度こそは…今度こそは……と

「うわぁ～それどころかすげぇ見下してるよ」

三発目の銃声
それは重なった私と相方の頭を同時に撃ち抜いた

Ｓｉｄｅ　ジル

「なんか…一瞬泣きそうになったんだけど……」

ジルは自分の足元で抱き合うように死んだ二人のモンスターを見ていた

「なんか…悪いことしたかな……」

ジルは罰が悪そうに腕を組み辺りを見回す
そして敵が居ない事を確認すると、その死体の一人をまず壁際に運びもたれさせる
そしてもう一人をその横にもたれさせた

「ごめんね…」

ジルはその二人の前にしゃがみ込み手を合わせる

その瞬間だった
死んだはずの一人が急にジルに向かって動き出した……と思ったら何かを指差していた

ジルはその方に視線を移すと、その先には一体の石像が置いてあった

「あそこになにかあるの？」

ジルは問い掛けた

死体はその問いに頷いた

そして体を壁に預けて、本当の意味で絶命した

「ありがとぅ…」

ジルは立ち上がると指差された石像を調べた

すると石像は思いの他軽くて簡単に押せた

ジルはその石像を押して行き、手摺りと手摺りの間にある不自然な隙間からその石像を落とした

その石像は1階の食堂に落ちると音を立てて割れた

ジルは2階から落ちた場所を見ると青く光る何かが見えた

「あれ…もしかして……あれのことを？」

ジルはふとさっきの死体を見つめた

「ありがとぅ…本当にありがとう」

ジルは感謝の気持ちでいっぱいだった

ジルは青く光る物は一端後回しにし、2階の奥を調べることにした

Ｓｉｄｅ　ゾンビ

おや？…何か揺すられてるような

私は目を開けた…っても肉無いからまぶたないや（笑）

まぁいいや

そこにはお嬢が私を壁際に運んでいるのが見えた

「（何してるんだ？お嬢）」

私は少しびっくりしたようにいく末を見守る

お嬢は私を壁にもたれさせると、もう一人の方へ行きそいつも私の横に運んできた

「お嬢……」

私は目から熱いものが出そうになった

既に涙腺無いから…感じだけね（笑）

「お嬢…お前って奴はぁ」

私は知らぬ間に体を乗り出していた

目の前でお嬢が目を丸くしているのがわかるくらいに近かった

「ヒントをあげるよ…お嬢……あれを落とせ」

私はもう一人が立っていたところにあった石像を指差す

私の意思は通じたみたいで、お嬢もしっかりその方を見つめてくれ

ている

「あそこになにかあるの？」

お嬢は聞き返してくる

私はすぐに頷き返してやる

「はぁ…俺は…もう限界だわ……」

私は壁にぐったりともたれ込んだ

ふと横を見ると、一緒に見張っていた奴が座っていた

「俺達…いい死に方出来たな」

そこで私の意識はなくなった……

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ

**ちょ…お嬢……いい奴やんけぇぇぇぇ！（後書き）**

どうでしたかねぇ？

次はここを抜けた部屋とその下のフロアの話になるかと

少しずつゲームやり直したりしてますので更新遅れるかもですがご了承くださいｆ＾＿＾；

感想とかこんなネタ使ってとかあればください（＜＿＞）

ではまた次の話で

［ある人、探してます］も読みにきてくださいねぇ～ｍ（＿）ｍ

**お嬢？目が……恐いですよ？…って、ぎゃぁぁぁぁぁ（前書き）**

遅れましたm（__）m
すいません…

ほとんど謎解き書いて無いのにくそ遅いですね…
頑張らなくちゃ

はい…それは少し置いときまして
今回の話はホール左、食堂側2階から1階の話です

特に謎解きはやってないので、説明とかはいらないかなと思いますが…
一応書きます
食堂2階から奥に行くとですね、通路があって扉が二つあります。
ゲーム序盤では、この通路から階段しかいけないのですが、のちのちここの扉が開きます。

それから下に行くと、ゲームでは休憩所で、ゾンビはいないんですよ
代わりにセーブ様のタイプライターとアイテムボックスとお役立ちアイテムがあるくらいです……が、小説は少しアレンジしました

では…どうぞ

**お嬢？目が……恐いですよ？…って、ぎゃぁぁぁぁぁ**

Ｓｉｄｅ　ジル

「私…さっきは悪いことしたな
案外いい奴もいるんだ……」

ジルは先程、食堂の２階で会った二人のモンスターの事を思い出していた

「でもあれはあれ…これはこれ（笑）」

ジルはパァっと明るく開き直る

今ジルがいるのは食堂２階の扉から入った通路で、入ると下に続く階段を取り囲むように通路がある部屋で、ジルが来た扉の逆側には二つの扉がある

そんな通路のど真ん中

足元には血をぶちまけたモンスターが三匹

「なんか…快感になってきちゃったんだけど……なんだろ…楽しい」

ジルの目が段々と怪しくなっていく

「てな…馬鹿な事やってないで行こ」

ジルは歩きだすと角を曲がった
そこには扉が二つあるから調べるためだ
「まずは手前の扉…と……やぱ開かないか」
ジルはドアノブを回して開かないことを確認すると鍵穴の上を調べた
「冠…か……さてあっちはっと」
ジルは地図のこの扉に矢印を伸ばし［冠］と書き込み、奥の扉に向かった
「これは…電子ロックかな」
扉の横に数字を打ち込むためのパネルがあることから推測する
「もぅ…見るものはないか……なら下に行こうっと」
ジルは少し上機嫌？で階段を降りて行く

Ｓｉｄｅ　ゾンビ

「行った？」
「行った…うん、行った」

一人のゾンビが立ち上がった
そのゾンビは近くで身動きすらしない仲間を揺さぶる
「偉い目にあったな…なんなんだ？あのお嬢は」
揺さぶられていたゾンビが問い掛けてくる
「んなこた知るかいな……あっ申し遅れました～いきなりなんやねんみたいなりましたが～私ら2階でいきなりお嬢に撃たれた三人組で、私はマルコですわ」
そういいつつ後ろの二人に目配せする
「まぁいいっすわ…いやぁねぇ～何か神妙な顔で来たなぁって思って、大丈夫かなぁって思ってたら急に笑い出してあの銃乱射しはるんやからなぁ～おったまげたでぇ」
マルコは後ろを見ながら話し出す
「確かに…俺らも他人から見たら恐いけど……あん時のお嬢って……怖かったよな？」
後ろにいたやつが話だし、他の二人が盛大に頷く
「あれは人ちゃうで…化け物やな……ウェスカーはんも無茶言いやるな～あんなん相手に出来へんて～なぁ」
マルコの問い掛け、これにも二人は盛大に頷く
「まぁわてら仕事終わったし～あがらせてもらいましょか～」

マルコは二人を手で煽ると食堂2階の方へと出て行った

Ｓｉｄｅ　ジル

何だろ…2階がギシギシ言ってるんだけど…（汗）

「まぁいいやぁ～1階到着～～」

ジルは最後の一段を飛び降りた

「何か～階段って最後だけ飛びたくなるよねぇ～～」

ジルは誰に問い掛ける訳でもなく独り言をつぶやきながら階段の裏に回った

裏にも部屋が一つあるからだ

その時、何かにぶつかった

「痛っ…何？……って…」

ジルが見たのは、自分を見下ろす爛れた顔だった

思わず涙目になる

「きゃぁぁぁぁぁぁ！」

そして思わず右足振り上げちゃった、テヘッ☆

てか何か当たっちゃった～

ジルはゆっくりと目を開けた

そこにいたのは股間を隠すようにうずくまり、身もだえるモンスター

「えっ…ちょ…何？……えっ？大丈夫？」

思わず手貸しちゃったし
って言っても私のせいだしね～

「苦しい？大丈夫？ちょっと…大丈夫？ってば」

ジルは大きく体を揺すぶった
その瞬間、モンスターの両肩がえぐれ落ちる
そしてモンスターがより一層大きな声で呻く
ジルは一瞬何が起こったかわからずに戸惑うが、刹那…自分がしてしまったことと今ある状況が空回りしてしまった

「キモいいいいい」

モンスターの首への見事な手刀
モンスターに４４４４万のダメージ…
モンスターの首は吹っ飛んだ

「きゃぁぁぁ～いやぁぁぁぁ」

首が吹っ飛んだのを見た瞬間に更に錯乱し、モンスターの体を手刀や蹴りやらで次々とバラバラにしてしまう

「やっちゃった…」

やっと落ち着いたジルが見下ろしているのは肉と骨がちりばめられた赤い染み

「でも…悪いのはこいつだしねぇ～私は悪くない～悪くない～うん…よし、次行こう」

ジルはパッと開き直ると階段下の小部屋に向かった

Ｓｉｄｅ　ゾンビ

「なぁ～お前ここがいいんだろぉ～？あん？」

そういいながらベッドに四つん這いになっている女性っぽい？ゾンビに襲い掛かる

「今日は二人でフィーバァァァーだぁぁぁ」

女性っぽいゾンビの後ろに回った男性ゾンビが腕を振り回しながら叫ぶ

「はい…今はここにいませんが、ケビンです～
ちっ…いっぺん殴ったりたいな……まぁこの二人は置いといて～
ここはお嬢が入ろうとしている階段下の部屋でござぁ～す。今から惨劇が見られますねぇ～

阿保の二人には裁きの鉄槌を～では、そうゆうことでぇ～さよならぁ……お嬢視点にＧＯ！」

「へェッへェッ」

Ｓｉｄｅ　ジル

「何か…私の名前が聞こえたような…聞こえなかったような……まぁいっかぁ」

ジルは一瞬聞こえた声は勘違いと決め
扉に手をかけ、ドアノブを回し扉を開く

「何やってんの？」

ジルはア然とする
ちょうど扉を入ると、目の前にあるベッドの上で男女？のモンスターがイチャついていた（なに的な意味で（笑））
それを見ていたジルは顔が赤くなっていくのを感じる

「私だって……まだ…なのに……」

ジルの頭の中で、一本の線が切れた

「私だってまだなのにいいいいぃ」

ジルは一瞬でショットガンを引き抜き、構えると、まだこちらに

気づいていないモンスターの真横まで行くと零距離で二人の頭を吹っ飛ばした

「私だって……私だってぇぇ」

そして感情が緩むと涙が溢れてきた

「あんな…気色悪い奴のが先なんて、いやぁぁぁぁ～」

ついつい本音がポロリ（笑）

そんなこんなで～２０分～

「ハァ…もーいいや…」

ジルは力無く立ち上がると二人で抱き合うように倒れる二人に更にショットガンの弾をぶち込む

「腹いせ……」

ジルは腹いせを終えると部屋を後にした

Ｔｏ　ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅ

**お嬢？目が……恐いですよ？…って、ぎゃぁぁぁぁぁ（後書き）**

だいぶ……ネタが……

コメディー書かないのでネタがなさすぎる…

でも……頑張りますよ

これからも更新遅いですが、原作やりつつかいていきますよ～～

では

また今度

**休憩～休憩～っとぉぉ～～ってやばくない？（前書き）**

まず更新遅れたの謝りますm（__）m

一応今日は練習がなかった為に一気に書いてしまいました～

またちょっと更新遅くなると思いますが、続き楽しみにしていてください

今回は特に話自体は進まないので説明は不要かと

それではどぞ

**休憩〜休憩〜っとぉぉ〜〜ってやばくない？**

Ｓｉｄｅ　ジル

「何か…休憩した気がしない……」

ジルは一件（詳しくは前回の最後の辺りで）があった部屋に戻って休憩していた

「まぁ…少しは休めたし……行こう…」

そういってジルは座っていたベッドから腰を上げ、扉に向かいかけた時、外から扉が開いた

Ｓｉｄｅ　ゾンビ

二人？は道を歩きながら話し合っていた

「あぁ〜疲れた……なぁ休憩しないか？」

そのうちの一人、少し高かっただろうスーツがボロボロになったゾンビが、もう片方のゾンビに問い掛ける

「そうだな…確かここ曲がったとこに休憩所あったよな」

問い掛けられたゾンビはすんなり受け入れると、近くにあった休憩所に向かっていた

「もぉ…見張りばっかやんなってくるよなぁ～」

スーツの奴が大袈裟な身振りで表現する

「ほんとそれだよな…肩凝ってきたわ」

相方は肩に手を置き、首を左右に振る

もちろん生きている人のように気持ちいい音なんて鳴る訳はない

「後で肩揉んでやるよ」

そういいながらスーツの奴が休憩所の扉を開けた時だった

「！？……」

その先にすごく驚いた顔のお嬢が……

「なぁ…これってまずくない？」

スーツの奴は相方に振り向く

「とりあえず仲良くなったら？」

相方はふざけた解答をした

「え？仲良くって？…え…じゃあやってみるわ」

スーツのやつは少し前に出る

もちろんお嬢は警戒して少し下がる

「今だ！」

スーツの奴はふと右手を差し出した

「えっ…何？……握手？」

目の前でかなり考えながらのお嬢がおどおどする

だけど、意思は伝わった

「握手すれば皆、友達！」

スーツのやつは更に右手を前にだす

やっとの事でお嬢が握手を返してくる

「よし…仲良くなる第一段階突破だぁ……次はリーマンの心得（笑）、名刺交換だ」

スーツのやつは胸ポケットからカードケースを取り出すとまだ綺麗な紙を一枚渡した

「え？…あっどうも……えと、カイン・ルバールさん？」

お嬢はゆっくりとその紙に書かれていることを読み上げる

「そう…俺の名前だよ！」

お嬢が一瞬視線をむけてくる

すると今まで訝しげだったお嬢の顔が明るくなった

「なんか…わかんないけどよろしく」

今度はお嬢から握手を申し出てくる
すぐにそれに握手で返す

「後ろの方は？」

お嬢はスーツのやつの後ろに立っている相方を指差した

「ほら、お前…も！」

「よろしく」

スーツのやつが軽く促そうと振り返ると同時に相方が前に出て握手して名刺交換までしていた

「早いな…お前、場数踏んでやがるな」

「たりめぇだ…生きてる頃はプレイボーイだったんだぞ」

二人はお嬢の前でくだらない会話をしているが、もちろんお嬢には呻いているようにしか聞こえない

「あなたたちはどうするの？」

お嬢がこれからのことを聞いてきた
とりあえずスーツのやつが身振り手振りで休憩することを伝えようとする

「…？ごめん、もう一回」

やはりお嬢には伝わらない

今度はわかりやすいようにその部屋に二人で座り込んだ
そこでお嬢は納得したように頷いた

「休憩するんだ…ねぇ、ゲームしない？」

お嬢がウインクしながら胸元からトランプを取り出す
とりあえずＯＫサインだしとく（笑）

「じゃぁ何する？大富豪とか？ポーカー？」

おっと、身振り手振りじゃ伝えらんないじゃん～
くるーっと部屋の中を見渡すと机の上に紙とペンがあるのを見つけた
とりあえず、それに書き込みお嬢に見せる

「ポーカーね…よし、はい」

お嬢は束ねたトランプを三人の中心に置く

「言っとくけど、私運強いよ！」

お嬢が自身ありげに呟く

「お嬢あんなこと言ってるぞ」

とりあえず隣の奴に話し掛ける

そいつはすでにお嬢に向けて指を振っていた

「ちょい書くもん貸せ」

そいつはかなり命令口調で言った

まぁ別に気にしないけどね～

とりあえず紙とペンを渡してやる

すると何かすらすらと書くとお嬢に見せた

「なんて書いたの？……脱…衣ポー…カー…」

みるみるお嬢の顔が赤くなっていく

それを見てまた何か書き足した

「…自身あるんだろ？……って上等じゃない！やってやるわよ」

あ～ぁ、お嬢が上手いこと乗せられて脱衣ポーカースタート

今回は私～カイン視点でお贈りします

え～私の手持ちは7の1ペアのみで後はバラバラ

一応交換する順番はお嬢から私、そして隣のやつですね

さぁお嬢が2枚交換、顔色は～？イマイチって顔してらっしゃる

とりあえず私の番だな

「3枚交換します」

7のペアを残しそれ以外を交換する
引いたカードは7、Q、A…スリー・オブ・ア・カインドに化けたか
隣の奴は1枚だけ交換
この時点で2ペアかフル ハウスの一点待ちか、はたまたストレート絡みかな

一巡してお嬢の番
お嬢は1枚だけ交換、顔色明るくなったし…

私の番か

「私も1枚交換」

Qを戻し引いたカードはなんとまぁ7、これで、フォー・オブ・ア・カインド馬鹿みたいな役がでなけりゃ負けないさ

隣の奴がまた1枚交換
そして伏せた

「早いね…私は後一枚」

お嬢が交換そして裏返す

私は交換せずに裏返す

そして三人で見せ合う
私の手はフォー・オブ・ア・カインド（日本での4カード）
お嬢の手はフルハウス

隣のやつは……まさかのストレートフラッシュ…
しかも後1枚でロイヤルかよ…

てなわけで勝ちは
隣のやつ＞私＞お嬢
となりお嬢が一枚脱ぐ事に…ってもジャケット着てるから躊躇い
なかったけどね

「もう一回よ！」

それから何回とポーカーを続けた
そして隣の奴が「疲れた」と言ったのを節目にポーカーを終了した
さぁ気になる結果ですがぁ

「何で私ばっかなのよ～！」
既に下着姿のお嬢が叫ぶ
私も上半身は裸の状態
にも関わらず隣の奴は上のシャツを脱いだだけ、しかも「暑い」と
言って脱いだだけ…

「お前すごいのな…」
ちょっと尊敬したりした

「真の決闘者は思い通りのカードを引けるのさ」

何言ってやがんだ？こいつみたいな事を頭の隅っこで思っていた事は内緒で（笑）

「そのわりにさ最初ロイヤルじゃなかったな（笑）」

とりあえず嫌味をちょこっと

「ん？ぁぁ、あんなんでロイヤルやったらお嬢のやる気削いじまうだろ？」

計算済みかよ……

「なるほど…そうして今のお嬢を拝める訳か…」

ちょっと納得（笑）

まぁお嬢からしたら羞恥心しか出てこないだろうけど～

まぁ楽しかったからいっかぁ

「もぅお嫁に行けない～」

館にお嫁の悲痛な叫びが響く

Ｔｏ　ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅ

## 休憩～休憩～っとぉぉ～～ってやばくない？（後書き）

どうでしたか？ポーカー

後ジルとゾンビが仲良くなったり～

これからもこの二人は出たり出なかったりです（笑）

ポーカー内のスリー・オブ・ア・カインドとフォー・オブ・ア・カインドは日本で言う3カードと4カードですが、以下二つと呼ぶのは日本だけです。ご注意を！

では次回までさようならぁ

## ケルベロスって案外簡単に手なずけられるんだな（前書き）

どもっす

今回から御呼びにあずかったレベッカです

ジル先輩とは初対面だけど頑張っていくっす（＜＿＞）

本来ジル先輩のストーリーでは出ないですが無視しますよ

ちなみに植物は私がやっちゃったのでねぇ

ゲーム本編では鍵取りに行ってくださいよ（笑）

それでは本編どぞっす

**ケルベロスって案外簡単に手なずけられるんだな**

Ｓｉｄｅ　ジル

カインとジャックと言う二人のゾンビと仲良くなったジルは休憩所を後にした

「なんか楽しかったけど…屈辱だわ……あんなのに下着姿晒すなんて…」

そのあいつらはというとまだ休憩所で休むと言うことだったので置いてきた

「さて……見なきゃいけないのは～ここ二つか」

ジルは地図を見ながら通路先の二つの扉を調べる対象にしたその二つの内一つはその先が小部屋に繋がる扉で、もうひとつは更に通路に繋がる扉

「まぁ小部屋の方からかな～」

その時だった

ジルの通り過ぎた通路にある窓からゾンビ犬が通路に入り、ジルに飛び掛かろうとしていた

「まず……間に合わない！」

ジルがホルスターからベレッタを抜き出すと同時くらいにゾンビ犬はジルに飛び掛かる
そして構えた時にはゾンビ犬に押し倒されていた

「ダメ！ダメだって……」

ジルはゾンビ犬を引き離そうと必死にもがく
だがゾンビ犬の爪が服に刺さっているのか離れない

「いや…まだ死にたくない～～」

それでも必死にもがく
そんなときだった

「ウァァァァァ」

ジルの目の先にいたのはカインだった
休憩所の中まで窓が割れた音が聞こえたのだろう

「カイン助けて！！」

ジルはこれまさに好機とカインに助けを求めた
カインはジルに乗っかるゾンビ犬に近づき頭を撫でる
すると狂暴だったゾンビ犬はたちまち大人しくなり、カインに擦り寄った

「すごいんだね…カインって」

ジルは感心したように頷く
そんなジルを見てカインは親指を立てる

「ねぇ…カイン、その子私が連れていけるように出来る？」

それにも親指を立てて頷く

「ならお願い！」

それから１０分後

「よし！」

ジルは一本の紐を持ち頷いていた

その紐の先には座るゾンビ犬の首

見事に手なずけたのだった

カインも何度も頷き喜びをあらわにする

ちなみにジャックはというと休憩所で寝ているらしい

「ありがと、カイン～心強い味方だよ」

ジルはカインに感謝の言葉を述べた

「この後はまた休憩所に？」

ジルはこの後の予定を聞く

カインは少し考えてから頷いた

「そぉ～じゃぁ助けてくれてありがとうね」

ジルは手を振り先にすすんだ

Ｓｉｄｅ　ゾンビ

「なぁジャック、今ガラス割れた音しなかったか？」

カインは目の前で寝そべるジャックに問い掛けた

「したんじゃない？」

すごく曖昧な返事

「俺見てくるわ」

カインは立ち上がる

ジャックは背中を向けたまま手をひらひらと振る

カインは小さく舌打ちして休憩所を出る

「舌打ち…聞こえてるよ」

ジャックは少し悲しい気分になった

「あそこだな…」

カインは全力（と言っても筋力とか削がれてるから歩いているのかもわからないくらい遅い（笑））で向かった

「ジル！やめろぉ」

角を曲がってすぐ、カインの目に入った光景

ジルにケルベロスが襲い掛かっていた

「カイン助けて！！」

ジルが私を見て助けを求める

毛頭そのつもりだぁ

ここでジルとの好感度上げてゲッチュ何て言うストーリーは描いてないぞぉ

とりあえず助けるが先だ

私はすぐにケルベロスの近くに行き頭を撫でてやる

ケルベロスは案外人懐っこくて頭を撫でてやると気持ちよさそうにするのだ

ちなみにこの解説は以前、動物管理課の奴に教えてもらって試したことないから確信ないんだけどな（笑）

ものはためしだ！

お？上手くいった感じじゃん！

「うわぁやたらこの子人懐っこいよ、可愛いなぁ」
とかいいながらずっと頭を撫でつづける
「すごいんだね…カインって」
おっと、ジルの事完全にスルーしてた…
「当たり前じゃないか！」
とりあえずカッコつけとくか！
「ねぇ…カイン、その子私が連れていけるように出来る？」
このお嬢さんは何てむちゃな事をおっしゃるのかしらぁ
ちょっと笑顔引き攣ってそうだなぁ～って引き攣る肉ないかぁ
まぁこれも試しだ、やってみよう
私は親指を立てて受け入れた
「ならお願い！」

ーケルベロス育成中ー

「ちょっ、座れ！座れって」
カインは必死になって手なずけようとするが、ケルベロスは首を傾げたり足で頭を掻いたり自由気ままにやっている

「エサあげるから～なっ？」

そういってポケットからビーフジャーキーを取り出した瞬間ケルベロスは大人しくなった

「お前、わかりやすいのな」

それからは楽だった

ビーフジャーキーを餌に色々仕込んだ結果ビーフジャーキーいらなくなったし（多分腹一杯かな？）

「ジルに渡しにいくか」

「よし！」

渡したらかなりご機嫌になったジル

「ありがと、カイン～心強い味方だよ」」

「どういたしましてだよ」

ビーフジャーキーで腹一杯になったから手なずけられたなんて口が裂けてもいえないや（笑）

「この後はまた休憩所に？」

ジルが今後の事を聞いてくる

「まだ休むよ～って言ってもわからんな」

仕方なく首を振っとく

「そぉ～じゃぁ助けてくれてありがとうね」

ジルが手を振って歩いて行く

私も返しておく

「あっ…ビーフジャーキー渡し忘れた……」

手の平に乗るビーフジャーキーに視線を落とし、肩を落とした

「まっいっか…次に会った時で」

私はジャックが待つ休憩所に戻っていった

Ｓｉｄｅ　ジル

「カインに犬もらっちゃったからうれしいや～」

誰から見ても恥ずかしいくらいに気分ルンルンな私スキップしてます……キモいな…

「とりあえずは予定してた部屋っと」

ジルは通路を曲がった先に二つある扉の手前の扉に手をかけ回す
だが予想どおり小部屋に繋がる部屋は鍵付きだった

「やっぱりか…マークは冠か」

また地図に書き込む

「じゃああの扉だね」

ジルの視線が横に流れる
そしてゆっくりとその扉に向かって歩いて行く

「よし…じゃぁいこうかぁ」

ジルはケルベロスを連れて行く

「さて…入ったはいいけど～」

ジルは苦笑いを浮かべていた
部屋に入った瞬間に二匹いたモンスターがケルベロスに吠えられ通路の隅っこに追いやられていた

「あはは～」

苦笑いしか出てこないわ…あはは（笑）

そんな時だった

「どうしたの？」

二股に別れた通路の奥から一人の女の人が出てきた

その人と目を合わせた瞬間に二人は驚いた

二人ともＳ．Ｔ．Ａ．Ｒ．Ｓ．のマークが服にあったからだ

「あなたはブラヴォーチームの人？」

先にジルが問い掛けた

ジルには見覚えがなかったからだ

「失礼しました…ついこの間ブラヴォーチームに配属されましたレベッカ・チェンバースです」

レベッカはジルに向け敬礼する

「そう…私はアルファチーム、ジル・バレンタインよ」

ジルも敬礼すると右手を差し出す

レベッカもそれに右手を差し出し互いに握手する

「ジル先輩は一人ですか？」

レベッカが現状を聞いてくる

「この子とね」

ジルは左手の紐を持ち上げる

その先にはまだモンスター達を睨み付けるケルベロスがいる

「そうですか…あはは、ちなみにあの二人は私の友達なんですよ」

レベッカは苦笑いしながら紹介を始める

「えと紺色のシャツを着た人がボブさんで白シャツに赤い斑模様の方がジョンさんです」

紹介された二人は軽く会釈する

「そぅ…そうだ、そっちから出てきたけど何かあった？」

ジルはレベッカが通路の奥から出てきたのを思い出していた

その先には更に扉があり小部屋が一つあった

「あっはい。何かデッカイ植物みたいなのがいたんですけど、脇にあった養分を送る機械弄ったら壊れちゃって…何かいきなり死んじゃったんですよ」

ジルはレベッカの説明を頭にイメージしながら解釈していく

「あっその奥でこんなの見つけましたよ。鍵だと思うんですけど～どこのだろ」

レベッカは胸ポケットから一本の鍵を取り出した

「見せて」

「はぃ、先輩」

ジルはレベッカに渡された鍵を眺めた

特に変わったところはないような感じがする

「ん？なんだろ彫刻かな？」

ジルは鍵の柄の部分に何かあるのを見つけた

「これは鎧の模様ね」

ジルは地図を取り出し、鎧と書き出した所を見つめて行く

「何かあったんですか？先輩」

レベッカも横から地図を覗く

「これは鎧の鍵よ、鍵が閉まってる扉には模様があってそれが今のところ鎧と冠の鍵なのよ。その一つがこれよ」

「なるほど、さすがです。先輩」

レベッカは感激の余り目を輝かせる

「とりあえずはここを抜けて食堂に出ましょう。それまでの部屋は見れるなら見て、鍵が閉まっていれば後回しね」

「了解しました。先輩」

レベッカは上機嫌で敬礼する

二人＋二人？＋一匹は食堂に向け歩き出した

To be continue

## ケルベロスって案外簡単に手なずけられるんだな（後書き）

どうでしたか？

まぁまだまだ新米のレベッカこれからは一緒にやっていくのでよろしくです

ちなみにやったことある人はわかりますがレベッカはクリス編でしか出ないキャラです

ちょっと感想に要望があったので出しちゃいましたよ

まぁこれからよろしくっす

## 勝手な行動ばっかでごめんなさいぃぃ～　byレベッカ（前書き）

どもです

やっと書けました

原作やりながらだと頭がこんがらがってきますね

すでにゾンビ達が言っていた部屋番号とか頭の片隅にもありませんし

てかゾンビの会話がなさすぎる…

まぁそんなよりも

今回からはジルとレベッカの馬鹿な進み方ですので

まぁ愛想尽かされないように頑張ります

## 勝手な行動ばっかでごめんなさいぃぃ～　byレベッカ

ＳＩＤＥ　レベッカ

「こんにちわぁ～今ジル先輩と館を行動中～それにほめられちゃったよ～えへへぇ」

レベッカはジルの横を歩きながらニヤつく

あ～先輩からの視線が痛いけど、それもいいやぁ

「先輩～～」

「わっ何よ？レベッカ？」

「えへへぇ」

とか言いながら先輩の腕に抱き着いてみたり～（笑）

「ちょっレベッカ、離しなさい！」

ゴンッ

「いったぁ……うに～」

ジル先輩のげんこつ痛すぎ～

思わず涙が～

でも二人だと楽しいなぁ～

ＳＩＤＥ　ジル

何かさっきからレベッカの視線が恐い…
いきなり抱き着いてきたり

「とりあえずは食堂に出るわよ」

「はい～」

レベッカほんとに聞いてるのかしら？（汗）
心強いと思ったけど～余計心配なんだけど…

「とりあえずは食堂に出た…まずはこの鍵で開けられる場所を見ていきましょう」

ジルがレベッカに手渡された鍵を取り出す

「了解です」

レベッカがかわいらしく敬礼する

「それより…ここだけまだ行ってないんだった」

それはさっきの通路と食堂を繋ぐ通路の奥
1番最初にケネスの死体を見つけた通路の逆方向にある部屋だ

「じゃぁ先輩、先にそこに行ってから鍵の部屋を回ったらいいんじ

ゃないですか？」

「そうね…この二つの扉を調べてから開けに行きましょう」

ジルは立ち上がった

「Ｌｅｔ' ｓ　ＧＯ！です」

あいかわらず暢気なレベッカがはしゃぐ

「さてまずはこっちからね」

ジルは１番奥にある扉に手をかけていた

「やっぱり開かないか～ここは向こうからかかってるのね」

ジルは地図に書き込んでいく

「先輩～こっちピアノみたいなんありますよ～」

「ちょレベッカ？」

レベッカはすぐ後ろの扉を開け中を覗いていた

「レベッカ、ちょっ待ちなさいよ」

ジルが止めるにもかかわらずレベッカ達は中に入っていく

「ちょっ待ちさいって」

ジルも後を追い入っていく

「おっきなピアノ～」

レベッカは部屋の中心にあるグランドピアノの前にいた

「レベッカ！危ないでしょ」

一応先輩だし叱っとかなくちゃね

ジルはそう考えレベッカを叱る

「大丈夫ですよ！もし何かあっても～二人がいますから」

レベッカは笑いながら後ろの二人を指差す

「でも二人がやられたら？」

「その時は盾にでもなりますよ～」

この子ったら何て酷い事をさらりと…（汗）

ほら～後ろの二人も引いちゃってるじゃん

「まぁいいわ…とりあえず何かないか探しましょう」

「了解であります～す」

そして四人で探しはじめた

ケルベロスは部屋の前で見張りですよ

「ねぇ先輩～この棚重たくて動かせないんで手伝ってもらえますか～？」

レベッカは部屋の奥から話しかける

「はいはい～今行くわ～」

ジルも手伝って棚を動かす

「ありがとうございます～先輩。あれ？これなんだろ～楽譜かな？」

レベッカが見つけたのは束ねた三枚の紙、それには音符が書き連ねられていた

「貸して、これは月光ね」

「月光ってあの有名なやつですか？」

月光とは世に知られるベートーベンの名曲だ（作者はよく知らない（汗））

「えぇ…でも何でこんな所に？」

「貸して下さい、先輩」

レベッカはジルから楽譜をもらうとグランドピアノの鍵盤に手を置き、弾きはじめた

「～～♪♪」

レベッカ自身は自信満々に弾き始めたが、聞いているジルからすると途中で詰まったり、音を間違えたりするから聞けたものではなかった

「〜〜♪♪」

フィニッシュだろう
レベッカは両手を鍵盤から離し、やりきったと言う満足感に浸りきっていた

「あぁ〜もうどきなさいよ、見本見せたげるから」

ジルがレベッカは押しのけて座る

レベッカは押された勢いで床に投げ出される

「先輩〜痛いじゃないですかぁ」

レベッカは顔をしかめさせながらもジルの演奏を聞こうと近くにあった椅子をとってきて座る

そしてジルの演奏が始まる

「〜〜」

ジルは目をつぶり
しっかりと音の流れを掴み、一音一音を丁寧に弾いていく

「〜〜」

そしてあっという間に時は流れ、ジルがフィニッシュする

レベッカは完全に聞き惚れてしまっていた

「ざっとこんなもんよ」

ジルがグランドピアノからレベッカの方へと行く

「レベッカ？レベッカ？」

レベッカはジルの声が届いていないようにじっとしている

「ふ～レベッカ」

ジルは名前を呼びながらレベッカの目の前で手を叩く。所謂ねこだましだ

それにより意識を取り戻したレベッカは椅子ごと倒れた

「もー先輩何するんです！」

頭をさすりながら訴えるレベッカ

「あんたが正気に戻らないからでしょ」

その時だった

部屋の壁の一部が天井に吸い込まれる様に上がっていった

「何これ？」

「あ～先輩～これ何か見覚えありますよ～」

レベッカが先にそこに入っていき何かを指差していた

「だからあなたは～待ちなさいって」

ジルがその隠し通路に入った時、レベッカは指差していた物を手に取っていた

そしてレベッカがそれを取った瞬間、ジルの後ろの壁が地面に落ち二人は閉じ込められた

「何？」

ジルは慌てる

何が原因かわからないからだ

「レベッカ何したの？」

レベッカもかなり慌てている様子だった

「とりあえずそれもっかいはめなさい」

ジルの指示を聴き入れ手にした盾のような物を元に戻すすると一度しまった壁がまた上がった

「開きましたよ！先輩」

レベッカは嬉しさと申し訳なさで目に涙を浮かべていた

「よかったわ」

ジルもかなり焦りながらも出られたことをよろこぶ

「レベッカ…これに懲りたら勝手な行動は慎むように」

「はぁい……それより先輩～あの盾って食堂の暖炉の所にあったのと似てますよね？」

レベッカの言った言葉にジルは食堂にあったものを思い出す

「たしか暖炉の上にあったのが茶色のあんなやつだったような」

「私取ってきますね！行くよケル」

そういってケルベロスを引き連れて走っていく

「まったく慎めって言ったばっかりなのに…まぁケル連れていっただけでも進歩か」

それからすぐレベッカはもどってきた

「先輩！これですよ」

レベッカが掲げている物はさっきレベッカが外した物と同じ形をしていた

「よし…なら取り替えてみましょう」

ジルはレベッカと隠し通路に入り、金色の盾を取る。例によって

壁が降り、退路を断たれる
　そしてレベッカが持ってきた茶色の盾をはめこむ
すると降りた壁はまた上に上がる

「うまくいった…ならこの金色のを食堂にはめましょう」

ジルの先導で一同は食堂へ向かう
そして食堂のくぼみにその盾をはめる
すると食堂の通路沿いにある時計が鳴り響き、少し左にスライドした

「すごい仕掛けね…」

ジルは時計裏から現れた小さな扉を開けると鍵を見つけた
その鍵は少し錆び付いていた

「これは～盾の模様の鍵？」

ジルはおかしいと地図を取り出す
地図の中には盾何て字は書いていないからだ

「盾の鍵ってどこの鍵？」

「先輩～どうしたんですか？」

レベッカがジルの頭の中を知ることなく問い掛けてくる

「地図に書いてない鍵なのよ」

ほら、とジルはレベッカに鍵を渡してやる

「盾の模様ですね～ん～？あれ？どっかで見たような～」

レベッカは空を眺めながら何かを思い出そうとしていた

「そうだ！リチャード先輩だ」

リチャードとはレベッカの所属するブラヴォーチームの一員

レベッカの話によると新米のレベッカの面倒見役だったそうだ

リチャードとはジルも面識があり気さくな奴でなかなか楽しかった

「で？リチャードがどうしたの？」

「リチャード先輩がこれと同じ鍵を持ってたんですよ！」

「あなたリチャードと一緒にいたの？」

「はい、ジル先輩と会うより結構前にですけど…」

「リチャードは生きているの？」

「わからないです…鍵を見せてもらった後別れたので……」

「そぅ…」

ジルは何とも言えない不安にかられていた

Ｔｏ　ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅ

## 勝手な行動ばっかでごめんなさいぃぃ～　byレベッカ（後書き）

皆さ～ん　レベッカだよぉ
どうだったかなぁ～？

ってかジル先輩ってピアノも弾けるんだよ～すごいよねぇ
思わず聞き惚れちゃったよ～

ねぇ～
すごいよねぇ～

文武両道ってまさにこのことなのかなぁ～？なんてね

はい…次回はまたまた私と先輩の百合ん百合んなお話だよ～

それじゃぁねぇ～

作者より
レベッカがキャラ崩壊？しかけてます
レベッカ愛の方すみませんm（__）m
これからもこんな百合レベッカになるかもですが～お許しを～m（__）m
それでは

**リチャード先輩〜〜〜ヨーンがぁヨーンがぁぁ（前書き）**

どもです

最終投稿から既に１０日くらいですね

すいません

新入社員として頑張る反面書く時間が削られていってます

頑張って書かないとだめなのになぁ

とりあえず今回でメダルをいっきに二つ手に入れちゃいます

後タイトルのヨーンってのは本編見たら名前ないやつがいますので

それがヨーンです（笑）

**リチャード先輩〜〜〜ヨーンがぁヨーンがぁぁ**

ＳＩＤＥ　ジル

「そうだ」

盾の鍵を見つめていたジルはあることを思い出していた

「どしたんすか？先輩」

「あれ」

ジルが指差したのはテーブルを挟んだ逆側
そこには砕けた石が散乱していた
それは２階で並べてやったモンスターに教えられたものだった

「確かこのなかに青い……これだ、宝石かな？」

「青い宝石ですかぁ〜〜あ〜〜それわかりますよ！」

「なんなのこれ？」

「私たちが会った廊下の途中にある部屋に虎の置物があるんですけど、それの説明に青と赤の目を持つ虎って書いてましたよ」

「レベッカナイス！」

二人は笑い会うとその部屋を目指した
敵がいないためスムーズに進むことが出来る

「ここ？」

「そうっす」

レベッカとジルは二人で部屋に入った
そこにはレベッカの言ったとおり虎の置物があった

「これを～左目か」

ジルがさっき手に入れた青い宝石を虎の左目にはめこむ
すると虎は音をたてながらゆっくり半分回転した

「これ…あのメダル？」

そこにあったのはカラスと絵の部屋で見つけたメダルと同じようなものだった

「とりあえず持って行きましょ」

ジルはそれを取りポーチにしまう

「さてリチャードを探しましょ」

ジルはポケットから地図を取り出し開けていない扉に目星をつけていく

とりあえず逆の方ね

ジルはバルコニーから2階に上がる計画を立て歩き出す
レベッカも後に続いてくる

「先輩～2階のどこ調べるんですか？」

「とりあえず反対側の2階よ…あっちは結構鎧の所あったから」

ジルが急ぎ足で歩きながら答える

バルコニーについた四人＋1は2階に上がって行く

2階にあがり見渡した時だった
2階の食堂側の扉が開いた
ジルはベレッタを引き抜き身構える

「三人もいる」

Ｓｉｄｅ　ゾンビ

「さてと帰るか」

こいつらは2階の階段の上で狂化ジルひばっちばちにやられたやつらだ

「ナレーション酷いな…ばっちばちにてやられたふりをしたまでだぁ」

「さぁこの扉を開けて下から外に出れば～帰れるんだぁぁぁ」
→こいつらも家に戻ることが出来ずにいた

「さぁいざゆかん我が家へ」

がちゃり

「でさぁ帰ったら何する～？」

「俺は～やぱカミさんとやるかなぁ」

「それもいいなぁ～ははは……はっ…は」

説明しよう。なぜこいつが失笑しだしたか…それは扉を開けた先に天敵がいたからだ！！

「何？このヤッ〇ーマンみたいなナレーション」

「まずい…馬鹿やってりまにお嬢が引き金引きかけてやがる」

「うぉぉ神よ～我等を助けたまえぇぇ」

「神ってこの紙か？（笑）」

一人のゾンビが祈りを捧げるゾンビにメモ用紙を一枚ひらつかせる

「ちげぇ～よ！なんだよその下らん駄洒落は～～」

Ｓｉｄｅジル

「なんか騒がしい」

ジルは目の前でワチャワチャやってる三人に腹がたってきていた

「先輩～この人達も連れていきましょうよ～」

「レベッカ大丈夫なの？」

「任せてくださいよ～」

レベッカは三人の所に歩み寄る

何やらごちゃごちゃと話をする

「先輩～ゾンビ1，2，3，が仲間になりました」

レベッカが報告した瞬間にゾンビ三人が一斉に振り向く

「ゾンビ1，2，3って…まぁいいわ……私はジル。この子はレベッカよ。ねぇレベッカついでだからあいつらもゾンビ4，5にしちゃう？」

指差されたボブとジョンが振り向く

「そのほうが楽ですね～じゃぁそうしましょう」

レベッカが明るく言った瞬間な五人のゾンビ達は肩を組み合い嘆き出した

「よし行こう」

そんな五人は完全にスルーしてジルとレベッカは歩き出す
ゾンビ達もおいていかれまいとついていく

「さぁやって来ました。このお部屋」

レベッカが前にしているのはバルコニーから入ってすぐの所にある
鎧の鍵がかかっている扉だった

「なんであんたはそんなにハイテンションなのよ」

ジルは少々疲れた顔で聞く

「楽しまないとやってけませんからぁ～」

それぇ～という掛け声と共にレベッカが鍵を開け中にはいる

「先輩～なんか靴が見えますよ」

「え？靴？」

ジルは急いで走った

「ジルと…レベッカか？」

そこに横たわっていたのは血まみれのリチャードだった

「リチャード？大丈夫？リチャード」

「リチャード先輩」

「俺はもうだめだ…この先にはでっかい蛇がいやがる…気をつけるんだぞ」

「わかった…もしかしてこの傷は蛇に？」

「あぁ…検討を祈る」

リチャードはジルとレベッカとゾンビ1，2，3，4，5に見届けられ絶命した

「さぁ先輩行きましょ～」

レベッカはすぐに元の調子だった

「あんた明るいわね」

「何度も言うようですけど楽しまないと～」

二人は奥の扉を入り更に奥の扉に手をかける

「あれ？鍵がかかってる…」

「あっ盾の鍵ですゆ…先輩」

レベッカはまたも盾の鍵を差し込み回していた

「いざゆかん…大蛇のもとへ～」

鼻歌を謡ながら入って行く

「何もいないね…」

そこは木で出来た部屋だった
ところどころに木箱があるいがいは奥にボイラー用の暖炉があるだけ

「大蛇なんかいないじゃん」

そういってジルが暖炉に近づいた時だった
暖炉から普通の蛇の比にならないサイズの大蛇が出てきた

「何よこれぇ！」

ジルはすぐにベレッタを構え放つ
レベッカもジルの反対に走っていきながら銃を放つ

「先輩大丈夫ですか？」

「うん…てかこいつ、こんな銃で死ぬの？」

「わからないですよ～」

二人は困惑しながらも引き金を引く

「きゃぁぁ」

ジルが噛まれた
ジルはその場に膝をつく

「先輩！」

レベッカがジルのもとへ走りながら銃を乱射する
その一発が大蛇の目を貫く
大蛇はたまらずのけ反り、暖炉の方へと戻って行った

「先輩！先輩……そうだこれ」

レベッカが手にしていたのは小鬢に入った薬だった

「先輩…痛いですけど我慢して下さいね」

レベッカはジルの左の腕を締め、血管を浮き上がらせる
そしてポーチから注射機を取り出し、薬品を吸い上げる
数滴だけ捨てるとその針先をジルの左腕に差し込み注入していく

「先輩…かならず助けますから」

それからすこししてジルは目を醒ました

「あれ？ここは？」

「先輩気がつきましたか？」

レベッカがにこやかに顔を出す

「レベッカ…ここは？」

「蛇の部屋のお隣りです」

「私毒にやられて…それからどうなったんだっけ？」

「私が血清を投与したので何とかなりました」

「レベッカが…ありがとうね……レベッカ」

「いやいやぁ～あっそうだこれ…暖炉の所にあったんですけど」

レベッカが出したのは月の絵が彫られたメダルだった

「これで三つか…」

今手元には風と星と月のメダルがある

これらが意味するものとは……

Ｔｏ　ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅ

## リチャード先輩〜〜〜ヨーンがぁヨーンがぁぁ（後書き）

どうでしたか？

レベッカが半分壊れてるってか頭のネジが数本飛んでるようなキャラに…

さぁさぁ次回のバイオさんは〜
レベッカです
レベッカとジル愛の共同作業
ジルとレベッカ、＋5＋1館を出る
ジルとレベッカ…館から寄宿舎へ
の三本です

それでは次回も見てくださいねぇ
ジャンケン……ポン
「グーはロケットパ〜ンチ」
「チョキは目潰し〜」
「パーは平手で往復ビンタァ」

## 館から脱出じゃぁぁぁぁぁ（前書き）

お久しぶりでｍ（__）ｍ

遅くなりました

まだ会社に慣れ始めてきたから執筆出来たような

これからまだまだ忙しくなるのでかなり遅くなる気がしますが～

ご了承下さい。

今回で館は脱出します。

館は……

まぁお楽しみでぇ

**館から脱出じゃぁぁぁぁぁ**

ＳＩＤＥ　ジル

二人は休憩に使っていた部屋からリチャードがいた部屋に戻った。
そこに待たせていたゾンビ達が驚いたようにこちらを見る。

「どうしたの？　皆？」

もっともなことをレベッカが聞く。
その言葉の瞬間に何かを隠すように壁を作るゾンビ達。

ＳＩＤＥ　ゾンビ

「まずい……こんなの見られたら」

ゾンビ2が振り返る先には、見間違えるほどグチャグチャになってしまったリチャードの姿。

「これはぁ～まずいよねぇ」

ゾンビ5も2の意見に乗っかる。

作「隠さなきゃなんね～のわかってんなら食うなよ（笑）」

突然、どこからともなく声がした。

「誰だ！　てか言ってることひでぇだろ」

「そ～だぁ！　俺達だって食わなきゃ飢え死にするんだぁ」
「講義する！　」
ゾンビ達は天からの声に、口々に文句を放つ。
「うっさいわねぇ！　何隠してんのよ？」
ジルが壁を作るゾンビ３の肩に手をかけた。
その瞬間、５人は心の中で同じ言葉を繰り返しただろう。

ＳＩＤＥ　ジル

「何隠してんのよ」
私が一人のゾンビの肩に手をかけた。
その時だった。
更にゾンビ達は悲鳴の様な声を上げた。
「何なのよ！」
私はゾンビを一匹、壁から引きずり出す。
その奥にあったのは、変わり果てたリチャードの死体。
「ちょっ……あんた達！」
ゾンビ達に振り向いた瞬間、ゾンビ達は目線をあらぬ方向へ飛ばす。

「全員そこ正座ぁぁぁ！」

ジルの怒声のもと、リチャードの横にゾンビ五人が正座する。

「で？誰？リチャード食べたの」

私はにこやかに追求を始める。

――それから数分後――

「じゃぁ、全員粛正ね」

私は適度に指の骨を鳴らす。

だってさぁ～相手骨だからなぁ～痛いのよ。

私はゾンビ達の胸倉を掴み上げ、顔面を殴打していく。

「先輩、先輩」

レベッカの声ではっとする。

なんとまぁ～

私こんなに暴れちゃったんだぁ～テヘッゞ☆

それはそれは、見るも無残に壁やら床やらにぶつけられたゾンビ達。

ある意味の地獄絵図だった。

「ほら、このメダルなんなのか吐きなさい」

ジルは集めた三枚のメダルを、ゾンビ達に突き付ける。
するとゾンビ達は案内するように手を振り、ジル達を導いた。

そしてついたのは、さっきの部屋を出た廊下の中間地点にある部屋の前。
ここも鎧の鍵で開けれる部屋だった。

「ここね」

ジルは鎧の鍵を差し込み、回す。
扉からは鍵が開いたような音がした。

その部屋の中は、両サイドを甲冑がずらり。
真ん中には、微妙な位置にある石像。
奥にはショーケースみたいなの。

「先輩〜あれ、同じメダルじゃないですか？」

レベッカがショーケースを指差して叫ぶ。

「みたいね……さぁ、どうやって開けるのか吐きなさい！」

私は近くにいたゾンビをガクガクと揺さ振る。
そのゾンビは部屋にある二つの石像を指差した。

「あの石像を、どうすんのよぉ！」

更に揺さ振り続ける。
するとそいつと違うゾンビが石像近くにある排水溝の様なモノを

指差した。
よく見ると排水溝っぽいモノは二つある。
「被せろってことね」
私はレベッカに奥の、私は手前の石像を押す。
石像はゆっくりと動き、やがて二つの排水溝を抑える。
だが、何も起こらない。
「どういうことよ！」
私はまた一人締め上げる。
また一人違うゾンビが、真ん中にあるスイッチを指差す。
「押せばいいのね」
私はスイッチを押す。
するとカタカタと音を立てて、ショーケースのカバーが外れる。
「よし、四つ目」
私はそこにあったメダルを手に取った。
「やりましたね！　先輩！」
「うん。さて、次は？」
くるりとゾンビ達に向き直る。
ゾンビ達は既に出口の扉を開いて、私達が出るのを促していた。

「あんた達素直ね……」

内心呆れつつも、出口に向かう。
そこで気づいたのは一人足りないこと

「番号〜」

レベッカが号令を出す。
案の定、ゾンビ達は顔を見合わせる。

「はい。番号！」

私が代わりに言ってやる。
すると、喋れないのでジェスチャーで自分の数字を現していく。

（って、ちょぉ待てや……何でレベッカの時は悩んでたのに、私ん時は怯えるようにやる訳？）

「まぁ、いいわ。足りないのは４か。どこいった？」

そういいながらジルが部屋を出た瞬間だった。
扉を出た先からゾンビ４が帰ってきた。

「あっ、アンタどこ行ってたの？」

ジルの問い掛けに怯えながら紙に書いていく。

「先の道を見てた？」

ジルが読み上げると、ブンブンと擬音語付きで首を縦に振る。

「じゃぁ揃ったし、行くよ」

改めてジル達は歩き出した。

それから向かったのは、ゾンビ４の案内でカラスがいた絵の部屋の道。

ゾンビ４は角を右に曲がった。

「ここ？」

ジルの問い掛けにまたまたブンブンと首を振る。

（私って、怯えられてる？）

怯えさせる気なんて毛頭ないジルは、少し凹んだ。

（もうちょっと優しくふれ合ってあげよう）

ジルは心に誓っていた。

そして扉を開けた先には、また通路。

ただ今までの通路と違い、外に出た。

渡し廊下の様なものだろう。

その先に、ケルベロスがいた。

まだケルベロスは気づいていなかった。

「先手必勝！　いっけぇ！　ケルちゃん」

ジルが指し示す方へ猛ダッシュするケルベロス。
足音に野生のケルベロスは気づいたようだが、すでにこちらのケルベロスは飛び掛かろうとしていた。

「よし、いけ！　そこだ！　よし」

ケルベロス同士の殺し合いを眺めながら、応援するジル。
そのジルを見ながら、囃し立てるレベッカ。
その二人を見ながら、怯えるゾンビ五人。

結果はこちらのケルベロスが勝った。
決め手は延髄噛み砕き！
「えらいぞ～はい、ビーフジャーキー」

ジルがビーフジャーキーをちらつかせるとケルベロス飛びつく様に跳ね回る。
ひとしきり跳ね回らせるとケルベロスの口にビーフジャーキーをほうり込んでやる。

「さぁ、行こう」

そういいながら歩くと、すぐに扉に行くてを阻まれた。

「また扉って、開かないじゃん」

ジルは二、三度ノブを回すが、ガチャガチャと音を起てるだけで開こうとしない。

「先輩〜これ〜」

レベッカののんびりした声の方を向く。
そこには茶色のプレートがかかっていた。

「穴が空いてるわね」

そのプレートには上下に合わせて四つの穴がある。
下側に三つ、上に一つ。

彫刻で何か書かれているようだが、錆によって見えにくくなっている。

「そうだ、メダル」

ジルはポーチから四枚のメダルを取り出す。
太陽と風と月と星の模様。

「どこにどれを、嵌めるんだろう？」

「よいしょ、てりゃ」

レベッカがまたまた先に嵌め込んでいく。

「ちょっ、レベッカ！」

レベッカが嵌めたのは下方に太陽、風、月、上方に星のメダルを嵌めた。

「ちょっレベッカ、間違えてたらどうするのよ！」

ガコンッ！

ジルの後ろで、何かが外れる音がした。

「え？　もしかして当たり？」

ジルは、もう一度ノブを回す。
するとガチャリと音を起てて開く。

「当たりだって……」

ある意味、レベッカの天性の勘をかいま見た気がした。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ

## 館から脱出じゃぁぁぁぁぁ（後書き）

さぁ～脱出しましたぁ？

まぁ次話ではちゃんと出てますので～

次は寄宿舎までの道のりですね

お楽しみに（＜＿＞）

## バイオハザード～ゾンビの倒し方講座～（前書き）

さぁ
書けたっちゃぁ書けた。
ただストーリー進みません
ちょっとしたお話みたいな感じかなぁ

今日中にストーリー進められたらいいなと思ってます

それでは
どうぞ

今回はあの人が出ます

## バイオハザード～ゾンビの倒し方講座～

「は～い。どもぉ～ジル＝バレンタインです。はい、それでは……ゾンビの倒し方講座と言うことで、助手はこの方々～」

ジルが手を向けた先には、啜り泣くゾンビ1、2、3、4、5の姿。

「それじゃぁ、まず～初級編からね！」

言うと同時に、ホルスターからベレッタを引き抜く。
そのベレッタの銃口を、ゾンビ2に向ける。

「簡単なのは、乱射。こうやって、何発か放り込めば！」

ジルは、何度もトリガーを引く。
その度に、ゾンビ2の体は跳ね、体から力が抜けていく。

ジルがひとしきり撃ち終えると、ベレッタを下ろす。

「まぁ、これが初級ですね。続いての初級編は～ナイフですね」

またまたジルはポーチから、ナイフを取り出す。
構えると同時に、ゾンビ4に向けて走り出す。

ジルはゾンビ4の首に左手をかけて、鉄棒の用量で、一回転する。
見事にゾンビ4の首は、へし折れる。
更にジルは、着地ざまに身を翻し、ナイフを振るう。
そのナイフの軌道は、滑らかに滑り、ゾンビ4の首を吹っ飛ばし

た。

「え～まぁ、初級はこんなものですね」

ジルは、カメラ目線でにこやかに微笑む。

その後ろで、吹っ飛ばされた二人のゾンビに呼び掛けているゾンビ達がすごく滑稽に……

「じゃあ次は～上級編ですね～」

ジルはベレッタを構え直すと、床にはいつくばり呼び掛けていたゾンビ3の脳天目掛けてぶっ放す。

すさまじい音と共に、ゾンビ3の頭が砕け散り、そこら中が血で染まる。

「これがヘッドショットですね！　一撃必殺です！」

それを間近で見たゾンビ1とゾンビ5は身を寄せ合いながら奮える。

「次はぁ～」

ジルはそういいながらゾンビ1の手を取り、無理矢理立たせる。

擬似的に掴むふりをさせると、振りほどくように腕を左右に振り、最後に豪快な右手の裏拳を叩き込む。

見事に、首から上だけが無くなる。

「これが、振りほどき」

その時だった。

ゾンビ5がジルの足にしがみつき、赦しをこうていた。

「ナイスタイミング～」

ジルは笑いながら足を左右に振り、ゾンビの手から足を引っ張り上げると、力いっぱい頭を踏み付けた。

「これが、スタンピング！　たまに倒れてるゾンビとかがやってくるから、覚えておこう！」

ジルは言い終えるや、辺りを見回す。
そこには、自分がやっつけた数々のゾンビ。
そのどれもが、頭から血を流している。

「助手全部死んじゃった。まぁ、いいや～じゃぁ次のコーナーはリポーターのレベッカさんに中継繋ぎます。ヨーロッパのレベッカさん！」

「どもぉ～私、レベッカは、ヨーロッパのとある村に来ています。ここである人と待ち合わせているんですけど～」

レベッカは辺りを見回すが、それらしい人物は現れない。

「遅いですねぇ～あっ、来ました！」

そこに来たのは、クールな感じの男、ラクーン市警の制服を着ている。

「改めて、紹介します。バイオハザード2並びに4より、レオン＝S＝ケネディさんです」

「遅れてすまない。追っ手から逃げていてな」

「それくらい構わないですよ～さて、今回はゾンビの倒し方講座と言うことで、まずはレオンさんにベリィ・トゥ・ベリィを決めていただきたいと思います！」

レオンはマジか？みたいな驚いた顔を一瞬見せて、押し黙った。それからいくらかしてから、レオンは顔を上げるとレベッカにこう言った。

「ついて来い」

そう言うや、走り出す。

レベッカも、それに続く。

レオンが向かったのは、落ち合った場所の奥にある小さな村だった。

「ベリィ・トゥ・ベリィだったな？」

レオンが、壁づたいに隠れながら確認を取る。

「はい。お願いできますか？」

レオンはその問いに、鼻で笑うと一言だけ言った。

「任せろ！」

そう言うと、中腰でハンドガンを構えたまま村に入って行く。

少し入った辺りで、レオンは指で来いと合図を出す。

レベッカはすぐに、追い付く。
すると、レオンはゆっくりと、モンスターの前に出る。
レオンに気づいたモンスターは、鎌を手に走ってくる。
レオンはタイミングを見計らい、ハンドガンの銃口をモンスターの足目掛けて放つ。
銃弾は見事に、モンスターの左足を貫く。
それにより、モンスターはバランスを崩し、レオンにもたれ掛かるように倒れ込んでいく。
レオンは、抱き留めるように腕を開く。
そして、モンスターの体がレオンの胸に触れた瞬間、レオンは開いていた腕をしっかりと閉める。
モンスターが倒れ込んでくる力を利用し、そのまま体を反らしていく。プロレス用語ではバックドロップの派生系だ
時間にして数秒。
ほんの一瞬で、レオンのベリィ・トゥ・ベリィが決まり、モンスターの頭が弾け飛ぶ。

「これが、ベリィ・トゥ・ベリィだ」

レオンは勝ち誇ったように、胸を張る。

「すごいですね〜一瞬で頭がバラバラに〜それでは、ヨーロッパとある村からレベッカでしたぁ！」

そういっていきなり中継を断ち切る。

「え？ちょっレベッカ？お〜い」

画面に呼び掛けても、返事なぞ返ってくることもなく。

「まぁいいわ。それではゾンビの倒し方講座はこれにて終了です。これからはまたダラダラした本編をお楽しみください。それではＳｅｅ　ｙｏｕ　Ａｇａｉｎ」

## バイオハザード～ゾンビの倒し方講座～（後書き）

いかがでしたか？
ってもストーリーすすまないからなぁ

レオンのベリィ・トゥ・ベリィはカッコイイので見てみることをオススメします（＜＿＞）

まぁどうでもいいですがね～

それではまたぁ～

**やっと外に出たぁ～と思うたら蛇が落ちてきたぁぁぁ～（前書き）**

前回ＵＰしたのを修正しました

まさかレベッカがベリー・ト・ゥベリーと言ってると思わなかった

**やっと外に出たぁ～と思うたら蛇が落ちてきたぁぁぁ～**

ＳＩＤＥ　ジル

「さて、倉庫っぽいところなんだけど」

ジルは腕を組んで、辺りを見回す。

「こういうのってさ、必ずストーリー上関係あるもんとか置いてるのよねぇ～ねぇ？」

ジルの問い掛けに、身を強張らせるゾンビ達。

「そんなに怖がらなくても……あっ、今回レベッカ遅刻しますので、前回レオンさんのとこ行ってまだ帰って来てないんで～……くそがぁ憧れのレオンさんに会いたかったし……何なんだよレベッカのやつ！」

ジルは八つ当たりで、傍にあった脚立を蹴っ飛ばす。

「綺麗な脚立……ってことは～あった」

ジルは脚立に立った自分の届く高さに、何かないかを探した。
すると壁に付けられた棚に錆び付いてはいるが、何かに使いますよ臭がすっごいするものを見つけた。

「よっと……クランク？　まぁいいや、持ってこ」

ジルは、クランクを鞄にほうり込む。

「行くわよ～」

ジルの案内で、後をついて来るゾンビ達。
最近はジルにも慣れだしたのか、怯えることも少なくなってきた。

「さぁ、いざゆかん……扉の先へ～」

ジルは勢いよく鉄の扉を開けようと、両手で弾くように押した。

「痛ったぁぁぁ！！」

腕を抱え込み、ジルは転げ回る。

ＳＩＤＥ　ゾンビ

「お嬢、きづけよな……」

「なんかテンション高いよな……なんかありそうな予感するわ」

ゾンビ２が不吉な予感を過ぎらせる。

「何にせよ、レベッカさん帰ってきてくれぇ」

ＳＩＤＥ　ジル

鉄の扉には、かんぬきがしてありただ押したくらいでは逆襲をくらうのは必然だった。

「なんなのよもぅ」

ジルは諦めてかんぬきを外し、外の様子を確かめながら出る。
すると虫の鳴き声が聞こえる以外には、なんて音はしなかった。
「あっ、ゾンビ達、そこにあるハーブ取ってきて」
ジルは扉を出たすぐのところにあったハーブを取るように指示すると、少し様子見と先を行く。
今いる場所はさっきの扉を開いた先が、すぐ曲がり角になっており、その先に中庭がある感じのようだ。
ジルは壁越しから、その中庭を覗く。
「ぶっ！？　何あれ……犬神家？」
ジルが見たのは、頭のない死体が、何故か肩倒立状態で死んでいた。
しかもそれが3体。
そしてその先には、もう1人、まともに立っている者がいた。
「レベッカ？」
「あぁ～先輩～ゾンビ死んでなかったからまだここに来てないのかなぁって待ってましたぁ～」
レベッカは、照れ笑いする。
「ってことはこの犬神家はレベッカが？」
「犬神家ってなんですか？　まぁ一応私です」

レベッカがやったそうだが……
一体どうやったら3匹まとめて犬神家になるのか
「あぁ、ベリー・トゥ・ベリーですよ～」
「へ？　あんた私の心読んだっての？」
「えへへ～こないだレオンさんに教わったんですよ～」
ジルはまたも犬神家状態の3匹を眺める。
そこに連れのゾンビ達も群がって行く。
「あぁ～レオンさんからプレゼントありますよ～」
「え？　私に？」
「はい～えっと～これと、これです」
レベッカが鞄から取り出したのは、ダンベルと丸い物体だった。
「で……このダンベルは？」
「えっと～女だからってもっと鍛えとかなきゃだめだぞって」
「ほぉ～まぁもらっておきましょうかね……って重っ！！」
「片方で10kだそうです」
「まぁいいや……でこれは？」

ジルは手渡された幾つかの丸い物体をレベッカに見せ付ける。
「さぁ～これについては「投げろ！」としか聞いてませんからねぇ」
「まぁレオンさんの事だし手榴弾かなんかでしょ。なんか色分けされてるしね」
「まぁ危なくなったら使いましょうよ。手榴弾だと信じて」
「そうね。ほら、行くよ！」
ジルが手を挙げると散らばっていたゾンビ達と、犬神家状態のゾンビを食ってたケルちゃんが走ってくる。
「えらいえらい。じゃ行くよ」
ジルは奥にある、鉄製の錆びた扉に手をかける。
錆びた扉は、嫌な音を響かせながら開く。
「一体何年放置してたのやらね」
ジルの呟きは、周りで鳴く虫たちの声にかきけされる。
ジル達が出てきたのは、溜池だった。
「向こうに道はあるんだけどな～水がねぇ」
ちょうど溜池を挟んだところに、通路があるのが見える。

「よし、ゾンビ達見てきなさい！」

ジルが指示すると、ワラワラと散って、あちこちを探し出す。
そして待つこと数十秒
ゾンビ2が、水路の横で手招きをしていた。

「何よ！　これは、解放用のクランクね。ってことは」

目の前にあったのは、溜池の壁を解放するために設けられた装置。
真ん中に四角い穴が空いている。

「これが、ここか」

ジルは鞄からクランクを取り出し、その穴に突き刺す。

「よし、正解！　じゃあこれを回すだけぇ」

ジルはぐっと力を入れる。
すると中で歯車が軋む音がし、ゆっくり回り出す。

「よしこのままこのまま～」

ガギンッ！

「ガギンッ？」

とても嫌な音が響く。
にこやかにクランクを回していたジルの顔に、焦りが浮かんでくる。

「きっと大丈夫だよねぇ、きっとぉ」

ジルは恐る恐る音がした方を見る。

そこで目にした物は、真っ二つに折れたクランクだった。

「なんで……折れんのよ～」

ジルはその折れたクランクを、溜池に向かって投げ捨てた。

すると、溜池の底が光った。

ジル達は何が起こったのかわからずそちらを見つめる。

そしてそのまましばらくしてから、何かの頭らしきものが見えてきた。

それは湖の精のお話に出てくるような綺麗な人でした。

「あなたが落としたのは、この金のクランクですか？　それとも１８８６年生の古びたクランクですか？」

「えらく詳しいわね……私が落としたのはそっちの古いやつよ」

「あなたは正直者ですね。それでは古びたクランクをどうぞ」

そう言って女神様が渡したのは、ついさっきジルが投げ入れたやつ。

「それでは……」

女神様はスゥッと溜池に消えた。

「え？　これ、いらないんだけど……」

ジルは手元にある折れたクランクを見つめた。
そしてちらっとゾンビ達を見る。

「力仕事は、男の仕事よねぇ」

ゾンビ達は、にこやかに笑うジルの後ろに鬼を見たそうな。

ＳＩＤＥ　ゾンビ

「やっぱきたな……こんなこったろうと思ったよ！」

「つべこべ言わずに回せ！　　またお嬢に吊されるぞ」

ゾンビ達は力の入らない手を必死に動かして水門を開いた。

ＳＩＤＥ　ジル

ざばぁぁぁぁっ

ゾンビ達が手で回し続けた結果、水門は開き、水が流れ道が出てきた。

「さぁ行こう」

ジルはさっさと梯を降り、向いに向けて歩き出していた。

「さぁさぁ行こう」

レベッカは、ゾンビ達を後ろから盛り上げようとするが、ゾンビ

達は疲れきっているのか歩こうとしない。
「早くこないとケルちゃんの餌だよ」
ジルの横ではせわしなく呼吸を繰り返すケルベロス
ゾンビ達は溜息をつくように首を振ると、立ち上がりジルの元へ向かった。

「よし、集まったし行くよ」
ジルは梯を先に上がる。
そしてレベッカ、ゾンビ達と上る。
「さて、一本道だね」

ポトッ
ジルの横で、何やらやらかい物が落ちた音がした。
ジル達はその方を見る。
「ちっこい蛇だぁぁぁぁ」
ジルは少し耳を澄ます。
すると少し先からもポトポトと音がする。
「先手必勝！」
ジルはそう叫ぶと、思い切り走り出す。
その後を追いレベッカ達が走り出す。

「1番乗り～」

ジルはその通路の奥にあった、作業用エレベーターに乗る。

「先輩」

レベッカも乗る。
そして、ゾンビ1と5が乗る。

「あっいっぱいだわ」

ジルが言った瞬間にゾンビ2、3、4がジルの方を見つめる。

「早く来なさいよ～」

小さくなっていく駆動音を聞き流す。
取り残されたゾンビ三人は互いに顔を見合わせて溜息をつく。

SIDE　ゾンビ2・3・4

「俺らっているのかな？」

ゾンビ2が呟いた素朴な疑問……
我等は必要とされているのだろうか？

「まぁ行くか……」

To be Continue

**やっと外に出たぁ～と思うたら蛇が落ちてきたぁぁぁ～（後書き）**

まだまだ続くのでお楽しみに（笑）

**寄宿舎到着〜〜てかレベッカ……なんでフマキラー持ってんの？（前書き）**

意地だけで１０分で書いてやったぜ…へっへっへ……

さて今回は寄宿舎のフロア１の話だぜよ（笑）

**寄宿舎到着〜〜てかレベッカ……なんでフマキラー持ってんの？**

ＳＩＤＥジル

「どうして……こうなった？」

ジルの目の前には、４匹のケルベロスと遊ぶレベッカ
前の回で下に降りたらケルベロスが３匹いたという。
それが何故かレベッカに懐いた。

「これで、ゾンビが５人にケルちゃんが４匹か」

ジルさーん、なかなか大人数になっちゃいましたねぇ

「そうね……って誰！？」

おいしいノリツッコミをありがとうｗｗｗ

「てか、早く行くわよ！」

ジルはさっさと向いにある扉の方へあるきだす。

「先輩〜待ってください〜」

ーーーーーーーーーーーー

「んで……」

ジル達はそのさきにある通路を抜け、建物に入った。

のだが……

「またケルちゃんが3匹増えた……」

現在ケルちゃん7匹

絶賛増殖中（笑）

「てかなんなのよ、このナレーション……うざいことこの上ないわ」

まぁまぁそぅかっかなさらず

「平常保てる方がすごいわ」

改めて眺めてみると可笑しい光景

敵役のゾンビとケルベロスがわんさか仲間にいるんだから

「とりあえずは、捜索か」

ジルは先にあるきだす

まぁ考えても無駄ってことっすね（笑）

「後でナレーション殺す」

目がマジっすよ……ジルさん……

「さて、この部屋は……いつも通り休憩室ね。なんつーかＲＰＧとかでダンジョン入ったらセーブ地点〜みたいなノリがぷんぷんするけど」

そこは触れちゃいけませんよ……ジルさん

「まぁ用はないし、他見に行くか」

「先輩～これは？」

レベッカが手に持っているのは赤い本だった

「何よそれ」

「ベットに置いてました」

「なら持っていっときましょ」

ジルがポーチに本を詰め込む。

「先輩」

「今度はなに？」

「ずっと思ってたんですけど……そのポーチすっごい大容量ですよね？」

言われてみれば……

今の赤い本もレベッカが抱えるくらいのサイズ、更にはショットガンや弾薬、スプレーまで入っているのに腰に提げている程度

「まぁ……色々よ」

色々って……なんなんだよ……

「さぁそんな事は置いといていこう～」

次に向かったのは通路を挟んだ向かいの扉

扉には数字が書かれたプレートがかかっているようだが読み取れない。

「部屋番号があるってことは寮みたいなもんかな」

そんな軽いノリで扉を蹴り開く。

扉がすごい音と共に何かがぶっつぶれる嫌な音を響かせ弾ける。

「突入～」

ちなみに言うと扉の後ろには血が飛び散っていたりするが～まぁ無視だ（笑）

「何もない……」

入ったジルの開口1番……

ただベットがあるだけだった

「いや、そうでもなかった……これここの見取り図だな」

ジルは壁に貼ってある紙を剥がす。

それは前にも取った地図と同じように絵が描かれていた。

「よし……てかテメェら邪魔だ！」

ジルが振り向く先、入口付近にワチャワチャと固まるゾンビ達

「早く出ろってんでしょ！」

ジルは蹴りながら部屋を出る。

「後は……」

ジルが左方向を向く。

そこは何故か廊下の途中から白く変色していた。

「不気味ね……」

言っても始まらないので入ることに

「何？　この部屋……蜘蛛の巣だらけ」

ジルは上ばかりを気にしながら歩いていた為に、床にあるものに気づかなかった。

「何よ……って～あはは～何？　この馬鹿でっかい蜘蛛は？」

しばしの沈黙……

蜘蛛が怒り任せに追い掛けてくる。

「早く早く逃げるよ！」

ジルはレベッカ達を来た方向に押し返す。

飛び掛かる蜘蛛に対して扉を閉める。

同時に扉が軋むが蜘蛛の体の方が柔らかいのだろう。
「はぁ……っぶな！　食われるとこだった……」
「死ぬ寸前でしたねぇ～（笑）」
「レベッカ……なんであんたはそう呑気でいられんのよ……」
言っても仕方ないことだとジルは悟り、奥に進もうとする。
ちょうど休憩所と蜘蛛の部屋の間に小さな通路があり、奥に扉があった。
「あそこ行くか、穴気をつけてねぇ」
ジルとレベッカは床に開いた穴を軽々越え、ケルベロス達も軽々越える。
ゾンビ達は、あまり足を広げると股が裂ける危険があるためにゆっくり穴のない脇を歩きだした。
そして最後になったゾンビ４が通り掛かった時、その足から余り長くはない触手が伸び、ゾンビ４の足に巻き付いた。
「ゾンビ４！　皆引き上げるよ」
ジルの合図で一斉にゾンビ４の腕を引っ張る。
触手の力はすさまじく、大人数でもびくともしなかった。
だが次の瞬間均衡が破られた。
ブチッと言う鈍い音が響き渡る。

その直後ジル達は体重をかけていた方に吹っ飛ぶ。
ゾンビ４の腕が引き契れたのだ（笑）
残った手足をバタバタさせて逃れようとするゾンビ４。
そして何を思ったかレベッカは穴に近づいて行く
「先輩、殺虫剤でいけますかね？」
レベッカの手にはフマキラー
「いや、相手間違ってるっしょ」
私もそう思います
「天の声は黙ってて」
おみそれ致しました……
「まぁ物は試しっすねぇ」
レベッカはフマキラーの缶を穴の端にたたき付け、缶に穴を開けてからほうり込む。
シューッと音をたてながらおちていくフマキラー
そして数十秒後、ゾンビ４は解放された。
「まさかフマキラーで触手を倒せるとは……」
「よかったですねぇ～」

レベッカは気にした風もなく1番最初に扉を開いた。

To be continue

## 寄宿舎到着〜〜てかレベッカ……なんでフマキラー持ってんの？（後書き）

ケルベロス一気に増えちゃった（笑）

まぁ次も頑張ってかいていこー

## やっぱり接着剤じゃぁ、体って引っ付かないですね～ＢＹレベッカ（前書き）

大変ながらくお待たせ致しました

仕事が忙しかったんですが、三連休と言うこともあり、やっと書けました

さて

本編では、寄宿舎の１番大きな部屋に当たります

この作品の原作の中で、寄宿舎が１番攻略が簡単な場所じゃないかなと思ってますね

そして、レベッカが……

これは、本編で……

では

どうぞ

**やっぱり接着剤じゃぁ、体って引っ付かないですね～ＢＹレベッカ**

ジル達は通路のような場所にでた。

「この先は～小部屋が二つで、大部屋が二つ、大部屋の一つに小部屋が二つある構造か」

ジルはさきほど手に入れた地図を見ながら歩く。

そんなジルの肩を誰かが叩く

「なによ」

ジルが振り返るとゾンビ４が立っていた。

何やら腕を振り上げて……

「ってあんた、腕治ったの？」

そういえば～前回腕引きちぎれちゃってましたよね～

「そぅそぅ～っていつまでいんのよ、天の声」

いや～ずっといるかなぁと（笑）

「全力で殴打してやりたいノリね……にしても治ってよかったじゃない」

そういってジルがゾンビ４の肩を叩いた時だった

ボトリ……

ジルの笑顔が引き攣りはじめる
地面には、ゾンビ４に繋がっていたはずの肘から先

「ちょちょちょっ！待って、いきなりはダメだわ、何？なんで外れたの？」

ジルも困惑するが、腕が取れた本人も困惑する
そんな中にレベッカが入ってくる

「どうしたんですか？」

「あっ、レベッカ。何かコイツ腕また取れたんだけど」

「あちゃ～やっぱり接着剤じゃダメでしたか～」

とか言いつつレベッカは腕を拾いあげる。
その腕をまたゾンビ４に付けると、腕周りにそって接着剤を流し込んでいく。

「ふぅ、ＯＫでＳ」

ゴシャッ！
ジルの右ストレートが炸裂
レベッカに３９のダメージ

「何するんですか～先輩～」

レベッカは涙目になりながら左頬を抑え、訴えた。

「うっさい！あんたのせいでおもいっきりビックリしたわ！後天の声、後で消すから」

私、何かしましたか？

「うっさい、なんとなくナレーションうざかったから殺す！」

そんな殺生な～

「問答無用！」

ジルはずかずかとあるきだす。

「先輩～ごめんなさい～」

Ｓｉｄｅ　ゾンビ

「なぁ、お前さ接着剤体に入れられてなんもないの？」

ゾンビ2がゾンビ4に問い掛ける。

「まぁ～ないかな」

ゾンビ4にはなんとなくしかわからずに答えるしかなく

「ならいいんだけどよ……気つけれよ。お嬢、荒れてるし」

「うん……気、つけるよ。とりあえず、いきなり腕ポロはやめるよ

うにするわ」
「いけるのか？」
「多分、危なくなったら……お嬢の前からいなくなるわ」
「そうか……がんばれな」
ゾンビ2はゾンビ4の肩を2度叩くとジル達の後を追い、歩きだした
「よし、行くか」
ゾンビ4もあるきだす。
ボトリ……
いつしか聞いた音がまた鳴り響く
またまた足元には腕……
ゾンビ4はしゃがみ込み頭を抱えた。
Ｓｉｄｅ　ジル
とりあえず、ジル達（ゾンビ4を除く）は大部屋にきました。
「って、ちょゾンビ4は？」
かくかくしかじかで……
「そぅ、旅立ったのね」

いや、生きてます

「まぎらわしい言い方すんな！」

ジルの延髄回し蹴りがヒット

天の声……の持ち主に２６０のダメージ

ジルさん……頭…がフラ…ラ、しま……す……

「頭ひやしとけ！とにかく、扉片っ端から調べてこい！」

ジルが指差すとゾンビ1、2、3、5は適当にバラけて扉を捜索しだす

この大部屋には3つの扉がある

1つは、今ジル達が入ってきた扉のすぐ隣にある小部屋の扉

1つは、上で説明した部屋に向かって反対側にある小部屋の扉

最後は1番奥にある、1番大きな扉

「さて、まずは隣の扉」

ジルはゆっくりと歩きだし、すぐ隣の小部屋の扉の前に立った。

「暗証番号付きか……よし、ゾンビ1と2開けとけ」

ジルの命令にゾンビ1と2は敬礼してから作業にかかる

「次は向こう」

ジルが反対に向けてあるきだす。
その途中、横の壁に細い通路があるのを見つけた。
「行ってみるか」
ジルはその通路に入る。
そこには小さなテーブルらしきものが置かれていた。
「ん？鍵？」
そのテーブルの上にあったもの、小さく見落としてしまいそうだったが、金色をしていて光を反射した為に見つけた
「持って行きましょう」
「先輩〜！」
レベッカの呼ぶ声に振り返る。
するとレベッカはジルの上あたりを指差していた。
「なによ……」
ジルは指差された方を向き、驚愕した。
「レベッカ！逃げろ！」
ジルは全力でその通路を逆に走った。
何がいたかというと……まぁ俗に言う、スズメバチですね（笑）
「ナレーション！あんた人事だと思って笑ってんなら人でなくして

やるから覚えとけよ」

ジルさん、すいませんでした……

「わかればいい！ってか無駄なツッコミさせせんなぁ～～」

ジルとレベッカは、大部屋の入口の前にいた。

「逃げ切れた……」

「先輩、皆が」

ゾンビやケルベロスは皆放置

「あいつらなら大丈夫でしょ、先行くよ」

ジルは違う部屋に向かいだす

次に向かったのは1番奥にある1室

「次はここいくよ」

ジルはまた勢いよく扉をぶちやぶる。

だがその扉の不意打ちアタックは、すんでの所でゾンビに当たらず、勢いあまったジルはそのゾンビの前に無防備な体勢で立ってしまった。

「まず……」

ゾンビはジルの肩を掴み、噛み付こうと顔を寄せる。
ジルは額を抑えて抵抗する。

「先輩！」

そんなジルの頭の横から、レベッカがゾンビの頭を殴る

ゾンビはそのストレートに怯み、引き下がる。
ジルは少し離れて、銃を構えようとホルスターに手をかけた
だが、銃を抜こうとした手をレベッカが抑えた。

「ここは、私に任してくださいよ！さっきの汚名返上です」

そんなレベッカに向けてゾンビが歩いてくる

レベッカはゾンビに対してまっすぐ立つと、手を腰に添え、目を閉じ、ゆっくりと息を吹き出した。

ゾンビの手がレベッカの肩に触れかけた時、レベッカは目を開いた。

レベッカは腰に添えていた手を一気に肩の高さまで振り上げ、ゾンビの両手を弾く
そして振り上げた勢いで手の平を返し、大きく1歩踏み込みゾンビの胸を突き飛ばす。

「ふぅ～」

レベッカは突き出した腕をまた腰に添え、またまっすぐに立つ
そして次は深呼吸はせず、右足を前に踏み出し、右手のショートブ

ローををゾンビの鳩尾に叩き込む。

「留めいきます！」

レベッカは左足を前にだし替え、左手でゾンビの腰を掴み引き寄せる。

そして引き寄せられてきたゾンビの腰に右手を添え、右足を少し後ろに置き腰を据える。

「レオンさん直伝」

引き寄せる力を目一杯使い、ゾンビを自分側に抱き寄せる。

そしてレベッカは、倒れ込んでくるゾンビにかかる加速度を利用し、ゆっくりとブリッジの体勢をとっていく。

「ベリー・トゥ・ベリー！」

ゾンビの頭が砕け散ったのか、床に刺さったのかは定かではないが、完全に犬神家状態になっていた。

レベッカは少し間を置いてから手を離し、立ち上がる。

「どうでしたか？」

「こうやって、犬神家になるわけね」

ジルは苦笑いを浮かべる以外に何も出来なかった。

「とりあえず～中調べちゃいましょぉ～」

レベッカは中に入っていく。

ジルは周りを見渡してから部屋に入ろうとした。

そんなときだった。

「はいやぁぁぁ〜」

ゴッガシャァァァン……

レベッカの掛け声と共に、ガラスやら木の板やらがくだけちる音がした。

「またやったか……」

ジルは入口のど真ん中に突き刺さった犬神家ゾンビを避けて入って行った。

To be continue

**やっぱり接着剤じゃぁ、体って引っ付かないですね～ＢＹレベッカ（後書き）**

いやぁ～

とりあえずゾンビ４の腕の話は前回に引き続きのネタです

そしてレベッカの秘密の七ツ道具（笑）の一つが出ましたね

まぁジルがだいぶん鬼畜キャラにかわってきてるのは～まぁ、こんな世界にいたら頭が多少狂ってきますよねぇ～って感じで思っててください～

そして、ある方の感想を……実現しました

レベッカのベリー見てみたい……と

やってやりましたよ

何故かレベッカが阿保な格闘キャラに早変わりしましたが、そんなレベッカも好きでいてやってください（笑）

それでは、続きはまた先になるかもですが、お楽しみにｍ（＿＿）ｍ

## ちょっとしたアンケート取るよ～ＢＹレベッカ（前書き）

今回はタイトルどおり

ちなみに先輩はいないよ（笑）

おもいっきりレベッカでいきますよ～

## ちょっとしたアンケート取るよ～ＢｙレベッカＳｉｄｅ　レベッカ

「というわけで～調子に乗ってベリーやって腰を痛めたレベッカが送るアンケートで～す」

そして、ジルさんの延髄回し蹴りを喰らってレベッカと退散していた天の声です

「はい、ただいま私たちは～寄宿舎に入ったすぐの所の休憩所（赤い本手に入れたとこ）で休憩中です」

いやぁ～敵もいなけりゃなにもないってので暇になっちゃってねぇ～

「んで作者の頭もネタ切れ寸前でパカーンいきそうなんで～私たちからの助け舟～。作者～泥舟に乗ったつもりで任せなさい～」

それ～よくあるネタだよなぁ～沈むじゃんとかマンネリだよ

「天の声さん～後でベリーね」

！？……冗談きついっすよ～あはは～泥舟なんて沈むじゃん……ねぇ？

「で……アンケートの内容ですがぁ」

そこからは私が説明～

「私の役とんな～」

レベッカのベリーが炸裂
天の声降板……

「ではではアンケートですが、読者の人達が見たいのをアンケートしようかなって思います～例えば使ってほしい武器とかぁこんなシチュエーションとか～まぁ無理なシチュエーションなら番外になるかもですけどねぇ～もちろん先輩だけでなく私でもいいですし～色んな意見を取り入れて見ようかなぁって感じですね～」

宛先は作者の亜差覇蚊まで
メッセージでも感想でもどちらでもどうぞです

「てなわけで～皆でバイオを盛り上げよ～でしたぁ」

「「バイバーイ」」

## ちょっとしたアンケート取るよ～Ｂｙレベッカ（後書き）

てなわけでアンケートのかいとう待ってます～

いくつでもオケですのでねぇ

ただ武器とシチュエーションとかで部類分けだけお願いしますｆ^

|^；

**あれってさぁよく聞くあれだよねぇ～？　　BYジル（前書き）**

久々の投稿だが……

笑わせることが出来ないような……

出来るだけ楽しんで（＜＿＞）

**あれってさぁよく聞くあれだよねぇ～？　　BYジル**

ＳＩＤＥジル

あの後、レベッカと私は部屋の奥に置かれた本棚の裏に梯子を見つけた。

「レベッカ～下はどお？」

「大丈夫そうですよ～通路が続いてるみたいです～」

「降りるから待ってて～」

「了解でありま～す」

私は梯子を降り、レベッカと合流した。

「ふぅ、とりあえず奥に行くしかないよね」

「ですよね♪」

なぜだが上機嫌なレベッカ

「あんた、楽しんでない？」

「多少は～楽しんでます～」

ジルはため息を堪えきれなかった。

「とりあえず行くよ」
先に行かなきゃ行かないしな
後からレベッカはついて来るし
二人は曲がり角を曲がり、無造作に置かれた木箱の横を通り過ぎて行く。
その先にある曲がり角を曲がったところで足がとまった。
「橋がない……」
ジル達の目線の先には水に浸かった扉が見えている。
だがその前に橋のない水路が走っていた。
「先輩どうします？ゾンビ達呼びますか？」
「さすがにこれは呼んでもダメでしょう」
水路の幅は裕に3メートルを越えている。
借りに助走する程の道があればなんとかなるかもしれないがそんな道もない。
もし落ちれば流されてどこに行くかもわからない。
「なにかないの？」

「そんな都合よくは～あっロープありましたよ～♪それに滑車も～」
「ロープはわかるけど……滑車？なんで滑車？」
「さぁ～ポーチにありました～」
頭をかきながら笑うレベッカに少し疑念をいだきながらもロープと滑車を受け取る。
「てかさぁ～これどっちかが渡らなきゃダメじゃない？」
「それもそうですねぇ～どうします？」
「そういえばさ～木箱あったじゃん！あれ使えないかな？水路にうかべてさ」
「それナイスなアイデアですよ！先輩！」

数分後
二人は水路脇で倒れ伏していた。
「はこんでさハァハァ……水路に……入れたまではよかったけどさ……」
ふと水路に目をやるが何も浮いていない。
「なんで気づかないのよ～！普通に流されてったじゃん！」

そう
ジル達が苦労して落とした木箱は落とした瞬間に流されていった。
「さぁますます行く方法がなくなりましたねぇ～」
「しかたない」
ＳＩＤＥゾンビ１
「なんかレベッカさんから呼び出しあったからちょい行ってくるわ～」
「おぅ～あっこれ忘れんなよ。はい」
ゾンビ２は小さな鍵を手渡す。
「あいよ～行ってくらぁ」
扉を閉じ声が下方へ向かう。
「これでも耳はいいんだぜ！っとここからだな」
ゾンビ１は梯子の前についた。
「足音もするしここだな」
～～～～～
「お待たせーっす！」

まぁジルさん達にゃわからないだろうから片手あげる

「遅いわよ。ほら手上げて」

そういってジル嬢は俺の胸元にロープを縛り付けていく。

「あの～お嬢さん？一体何を？」

「ほら出来た～」

「いや、聞いてくださいよ～」

「何呻いてんのよ。さぁいってらっしゃい！」

ドンッ！っと効果音つきでゾンビ1が水路に蹴り出される。

「お嬢さん～～～何を～～～」

「よしゾンビ1！向こうへ渡れ！ロープは持っててやる！」

「くそったれ～～～～～」

～～～～～～

ゾンビ1は奇跡的に無傷で渡りきっていた。

「よしゾンビ1、ロープを結び付けろ」

言われたとおりにしないとジル嬢に殺されかねないので仕方なくロ

ープを縛る。

「よし、ありがとうゾンビ1～」

「ありがとう……初めて言われたような気がする……」

ＳＩＤＥジル

「なかなか水流きついわね」

ジル達もロープをつたって渡りきっていた。

「ゾンビ1がいなかったらきつかったですねぇ～」

「ほんと助かったわ」

ジルがそういった時ゾンビ1がジルに抱き着いた。

「何なのよ！」

顔面に裏拳がＨＩＴ！！

ゾンビ1はゆっくりと後ろに倒れていった。

「まったくいきなり抱き着いてくるとわ」

「ただ嬉しかったのを表現したかっただけだと思うんですけど～」

「そんなもんかしらねぇ？まぁ行きましょ」

～～～～～～～～～

ジルとレベッカはゾンビ1を残し扉を越えた。

「半分水に浸かってるわね……」

ジル達が入った部屋は真ん中に大きな水槽がありそれを囲むようなドーナツ型をした部屋だった。

「とりあえず扉を確認していきましょう」

ジルは入ってきた壁沿いにある扉に向かった。

「空いてるみたいですね～入ります？」

「入らなきゃ意味ないでしょ」

ジルは勢いよく扉を開いた。

つもりが、水圧により少ししか開かなかった。

「気分のらないわね……」

「とりあえず～散策ですよ～」

レベッカは先に奥に行く。

だがその部屋は真ん中にテーブルと天井から根っこが生えている以外

「ちょい待て」

あら？ジルさん、なんですか？

「いやいや天井から根っことかありえないでしょ！」

と言われましても～仕様ですので～

「ほんとに意味わからないわよね……ってかレベッカ何してんの？」

「いやぁなんかなるかなぁ～って」

レベッカは根っこに栄養剤らしき物をいくつも突き刺していた。

「ほら、無駄な事やってないで行くよ」

ジルが扉に手をかけた時、扉の向こうから何かがぶつかる感触がした。

「レベッカ！」

「敵ですか？」

レベッカも集まり、扉の両サイドに位置付く。

「レベッカ、行くよ…3．2．1．GO！」

ジルは扉を開く。

だがそこにゾンビの姿はなかった。

「思い違いかねぇ？」

ジルが先に出て、レベッカが後に続く。
そのままゆっくり歩きながら周りを見渡していた時だった。
「先輩～あれってよく聞くあれですかね～？」
レベッカはある方向を指差しながらジルを呼ぶ。
振り返ったジルもその方向を見る。
「多分よく聞く、あれでしょう」
目線の先には水の上に突き出た水を切る三角形の物体
「レベッカ、逃げるよ！」
「イエッサーであります！！」
二人はとりあえず頑丈そうな扉を目指し、全力で走った。
だが水圧におされ上手く前に進むことが出来ない。
次第に例のアレはぐんぐん近づいてくる。
「そうだ！レベッカ、水切り出来ないの？」
「なんですかぁ？その水切りって」
「知らないならいいわぁ！！」
「いや、やってみるんでどうやるか教えてください！」
ジルは水の中を走りながらレベッカに伝授していく。

「こう、なんかユラーッてなってユラーッてやってドパーンみたいな」

ジルさん……
いくらなんでもそりゃ無茶でしょう

「だってあれ説明しにくいじゃん！ってかレベッカ～やるなら早く～もう来てるから！」

「わかりました！行きますよ鮫さん！」

レベッカは水の力でとまり後ろを向く。
そのままの流れで右手で弧を描く様に手を動かす。

「そう！レベッカ、それ！ユラーッとやってユラーッてなって」

「「ドパーン！！」ですよね？」

レベッカが引き付けた右手を真っすぐ突き出す。
それと同時に水面が裂け、鮫もろとも弾きとばす。

「レベッカ……あんたマジ？」

「なんか出来ちゃいましたねぇ～」

レベッカは自分の拳を見つめながら小さく呟く。

「てかレベッカてほんと何者？」

「先輩、なんか言いましたぁ？」

「なにも～とりあえずあの鮫が復活しないうちに見るよ！」

ジルは先ほどから向かっていた扉に向かった。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ

## あれってさぁよく聞くあれだよねぇ～？　ＢＹジル（後書き）

さぁ
遅くなりました
申し訳ない……
そしておもしろくなかったはずだ……
申し訳ない
次は頑張るぜぇ～（＜＿＞）

## 先輩！先輩！外に餃きてるっぽいですよ～（汗　by　レベッカ（前書き）

遅くなり本当に申し訳ないｍ（＿＿）ｍ

リアルが鬱に入りかけていて何もする気が起きず最低限の行動しかしていなかった……

とりあえず思った……

この小説……

ゾンビ達いねぇとつまらんわｆ＾＿＾；

てな訳でこの話までジルとレベッカをお楽しみください

**先輩！先輩！外に鮫きてるっぽいですよ～（汗　ｂｙ　レベッカ**

ＳＩＤＥ　ジル

「よぉし！！避難完了！レベッカ大丈夫？」

「なんとか大丈夫です～だけど、この部屋、なんなんですかね～？」

ジル達が入った部屋には水槽や何かする為の機械が設置されていた

「あの鮫を倒す方法……方法……」

「先輩～これ排水の設備みたいですよ～」

レベッカの指差す物、壁に備えられた機械。クランクまでついている。

「なんて好都合な物が……とりあえず回すわよ」

２人はクランクを手に精一杯回しはじめた。

クランクは軋みながら回りはじめる。

バキッ……

２人の目が点になる

クランクは根本からボッキリ折れてしまった。

「嘘ぉぉぉ」

ジルは叫びながら取っ手の方を手に呆然とする

「先輩～どうしますかぁ～」

「なんであんたは気楽に笑ってんのよ」

「だって～……面白いじゃないですか？」

「じゃないですか？って面白いわけねぇだろ！！どーすんのさコレ！」

ジルは手にしていたクランクをほうり出す。

そのクランクが沈んだ所が光だした。

「まさかこれって！」

「泉の精さんでしょうか？でもろくな物くれませんでしたよね？」

「そうね……しかもまったく同じパターン……ハッキリ言って相手する必要もないわね」

ジルとレベッカはまた探しだした。

そんな中現れた泉の精は話し出した

「あなたが落としたのはこの金のクランクですか？それとも銀のクランクですか？」

そこでジルはピンときた

「確かあの時は……」

……「あなたが落としたのは、この金のクランクですか？　それとも１８８６年生の古びたクランクですか？」……

「これは……まさか真実はないが言えばくれると言う主人公にのみ許された主人公補正か！！泉の精さん！私が落としたのはその銀のクランクです！！」

ジルが少し謙虚に金ではなく銀と言うと泉の精は顔をしかめた

「あなたは嘘つきですね……」

「え？……じゃぁ金のクランク」

「嘘つきですね……」

泉の精はそう言うと消えていった。

「ちょいちょいどおすんのよ！！」

「先輩〜〜」

そんなジルにレベッカがしがみついてきた。

「何？」

「扉にあの鮫が……」

そこでふと扉の方を見る
すると、小さくだが何かがぶつかる音がしていた。
「まずい……非常にまずい……」
ジルはポーチをあさりだした。
「あぁ〜〜」
ジルはポーチの中で何か硬いものに触れた。
「レベッカ……鮫は一匹だったね……」
「確か一匹だったはずですけど〜まさか先輩?!」
ジルはゆっくり扉に向かった。
レベッカいわく
「その背中には魔が見えた」と言う。
「突撃ぃぃぃぃ!!」
水圧で押されながらも扉を開ける。
すると鮫は待ち構えていたらしくすぐにジル目掛けて泳いできた。
ジルはポーチからダンベルを取り出すと、鮫と正面を向き合った。
そして鮫が水から飛び上がり、ジルに噛み付こうと大きく口を開く。
「待ってたよ!!」

ジルは少し体を傾ける。
その体は水の浮力でゆっくりになる。その真意は倒れきるまでに次の動作が出来る。

ジルは左足を遠くに置く。
その勢いで右手を通り過ぎ行く鮫に向け振るう。

そのダンベルは鮫の右目の上を捕らえ、角の部分が肉をえぐったのか、鮮血をジルに浴びせ掛ける。

「次〜！！」

ジルは体勢を立て直し、一気に走らず水に逆らわぬように鮫に向かう。

だが鮫はジルに振り向かず、逆方向を見つめたままだった。
そしてすっと動き出したかと思ったらすさまじい勢いで泳ぎだす。

その先にあるのはジルが開け放った扉。
そしてそこにはレベッカが立っていた。

「ヤバッ！！レベッカ！逃げて」

ジルの声を聞いたレベッカは一度頷くと逆に部屋の壁に向かって走り出した。

「ちょっ！レベッカ！外に出なさいって！」

ジルは叫んで静止させようとするがレベッカは止まらない。

レベッカは壁際にたどりつくと壁に突き刺さっていたハンガーかけに手をかけた。

その時点で鮫は入口に到達し、今にも飛びつかんとしていた。

ジルはひたすらヒヤヒヤしながら行く末を見つめていた。

そんな中、水が跳ねる音が響く。

それと同時、レベッカが壁を蹴り、背面跳びの体勢で鮫の背後を飛び交わす。

その途中レベッカは体を捻り、何かビンのような物を3本鮫に投げ付ける。

その内2本は周りの水に沈んだが1本だけが鮫のエラの部分に挟まった。

「先輩！今のビンを撃ってください！」

「はぇ？！」

「あのビンは、私が調合した火薬が入ってます！だから撃ってください！」

「……了解！」

ジルはホルスターからベレッタを抜き取ると左手の手の平にストックを置き、包み込むように支える。

「……集中……集中……」

ジルは自分を沈めこむように息を吐き、落ち着かせる。
一度ふっと吐ききるとキッとビンを見据えた。
鮫は壁にぶつかり右往左往しながらもまたジルの姿を見つけ、向かってくる。
「ここ！」
ジルが引き金を引く、銃弾は水に入り失速はしたが鮫のエラを捕らえた。
そして銃弾はエラを貫き、ビンを砕いた。
直後銃弾に残ったわずかな熱量に反応し、大爆発を起こす。
ジルは爆発の直前に水に潜り、衝撃を最小限に抑えた。
レベッカもジルとは違う所で着水して爆発の直撃を避けていた。
波がひきはじめたのを確認し、顔を出す。
爆発し頭を失った鮫の死体がゆっくりと沈み始めていた。
「レベッカ……ナーイス！」
ジルはレベッカに向かって走り出す。
瞬間水に足を取られ、顔面から水に飛び込む。
「先輩？！……大丈夫ですか？ってそんな訳無いですか？」
「わかってんなら手くらい貸しなさいよ……」

ジルはレベッカを睨みながら立ち上がる。

「えへへぇ～でも倒しましたねぇ～」

「疲れたわ……ハァ……」

「はは～それよりこの鍵ってあの部屋のですかねぇ？」

指差しているのは逃げ込んだ部屋の隣にある部屋の扉。

「そうだといいけど……」

ジルはゆっくりとその扉に向かった。

レベッカもその後を追い歩き出した。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ

## 先輩！先輩！外に鮫きてるっぽいですよ～（汗　ｂｙ　レベッカ（後書き）

はい……

原作だとちゃんとボタン一つでクランクが回ったことになるシーンでございますｆ^＿^；

多分記憶ないんじゃないかなぁ～

ただＤＳのデッドリーサイレンスではリメイク版ながらタッチペンでグルグルやらなければならないめんどくささ

後本来鮫はちっちゃいの含め２匹いるんですが

２人の話を長々してもおもしろくないんで割愛で（＜＿＞）テヘッ

とまぁおもしろくなかったかもでしょうが次からはゾンビ達も帰ってきます（＜＿＞）

お楽しみに

## お嬢達が帰ってきたZE～～☆☆　By ゾンビ～S（前書き）

遅くなりやしたぜ

今回からゾンビ達が戻るぜ～～
ちなみに前編と後編にしたんだぜ～
後編はちゃっちゃと書くからねぇ～

**お嬢達が帰ってきたZE～～☆☆　By ゾンビ～S**

SIDE　待っていたゾンビ達

「てなわけでいきなり私らから始まる訳ですが」

ゾンビ2は大広間の真ん中でゾンビ3、4、5に向けて話し出す。

「だな～かれこれ3話くらい出てなかったからなぁ～でもトップ俺らからってことは今回から戻るんだろうがな～」

ゾンビ4はケルちゃん達と戯れながら話し出す。

「にしても遅いなぁ～色々報告せにゃならんのになぁ～」

「ほんとだよなぁ～」

ゾンビ3とゾンビ5が話あっていた時ガチャッという扉が開いた音が大広間に響いた。

その音に4人は振り向く。

「ただいま～」

「ゾンビ達、ちゃんと調査してたか～？」

その扉から見覚えがある顔が覗く。

「お嬢～～」

「お嬢達が帰ってきた～」

「おかえりなさいませ、お嬢」

ＳＩＤＥ　ジル

「帰ってくるや、敬礼やらヤクザの挨拶みたいにされる私て何よ？」

ジルさん、笑顔が多少引き攣ってますよ

「うっさい。んなこと自分でわかるわ」

すいません……自重します……。

「わかればいい」

「久しぶりだね～皆ぁ～」

ジルの横をレベッカが通り過ぎ、ゾンビ達に抱き着いていた。

その周りに、ケルちゃん達が集まってくる。

「あの子よく馴染めるわ」

いや、ジルさんもなかなかに溶け込んでますよ？

「そぅ？ありがとぅ……。って違うし、なじみたくないし。」

そんな強情っ張りは嫁のもらい手いなくなりますよ？

「うん、死にたい？」
丁重にお断りします。
「待て、コラァ」
待てと言われて待つ馬鹿はいませんよ
直後、銃声が鳴り響く。
ちょっ、ジルさん……？顔がマジなんですけ・ど？
「いやぁ、割とストレス溜まってるから～ね？」
そういいながらジルは銃を構えなおす。
「待て、こらぁ！駄目作者～！」
すいません
すいません
だから撃たないでぇ～
「ちっ、まぁいいわ」
ジルは銃をしまう。
その後、ゾンビ達に向かい合う。
「さて、あんたらの報告聞こうか」

ＳＩＤＥ　ゾンビ２

「そだそだ。紙はたしかあっこに」

ゾンビ２は大広間の端にある通路に入って行く。
この通路の奥には大きな蜂の巣があり、その下に署名帳がある。

「ブンブンブ～ン。蜂が飛ぶ～っと」

ゾンビ２はえらく機嫌がいいのか歌いながら署名帳を手にする。

「後、あったあった。ジャジャーン、ボールペン～」

その某青猫ロボの真似はくらい闇へと消えた……

「ちょぃ、ナレーションってか天の声」

はい？なんザマショ？

「あんまりじゃないか？ボケをノーリアクションでスルーってさ。
知ってる？それって芸人潰しって言うんだよ」

勿論知ってますよ
むしろあなたが知ってる方が驚きですよ

「そんくらい知ってるに決まってるだろ。館の休憩所で寄ってたかってお笑い見てた俺達だぞ」

寄ってたかってって……
てかここアメリカですよね？

芸人潰しておもいっきり日本発祥じゃん

「それでも知ってんの」

ゾンビ2はきりがないと判断し、頭をあげる。
すると後頭部に何かが当たる感覚が伝わってきた。

「ひゃっは～やっちまったぜ～」

ゾンビ2は後ろを振り向く。
そこにはよく見かける黄色と黒色のツートンカラーの虫。
嫌な羽音を響かせ、次から次へと出てくる。

「逃・げ・ろ～～～」

ゾンビ2は後ろも振り返らずにジル達の元へ走り出す。
だが後ろからはしっかりと悪夢の羽音が聞こえる。

「お嬢～～」

ゾンビ2の叫びは、その場にいたすべての人物に届いた。

「えらく遅かったね～」

「ほんと、さっさと出来ない？って何で走って……ってあれは……」

「スズメバチみたいですね～しかも大量に～」

「あんのやろ……次から次に問題起こしやがって」

ジルが1歩前に出る。

「お嬢〜〜」

ゾンビ2は優しく出迎えてもらえると思い、両手を広げる。
その視線の先、ジルは片足を膝まで持ち上げ叫んだ。

「こっちくんなぁぁぁぁぁ」

ジルの足は水平にまっすぐ突き出され、走り込んできたゾンビ2の腹に減り込む。

「グ・Ｗａ〜」

ゾンビ2の体から軽ーくポキッと音がしたかと思うと
ゾンビ2の胴体は蜂の大群を掻き分け、遥か後方の壁に大の字で衝突する。
そして蜂もそれをおいかけ、ゾンビ2の頭の周りをたむろする。

「お嬢……酷い……ＺＥ－☆」

ゾンビ2は壁から体を引きはがす。
途端に体が腰から2つに折れ、もはや体操選手のような柔らかさが実現した。

「ってか、これさ。柔らかさとか以前に体ぽっきり逝ったみたいなんよな」

それはそれはご愁傷様です。

「いや、「ご愁傷様です。」じゃねぇよ。どうすんのさ？まさかこのまま匍匐前進でいけっての？」

もちろんじゃないですか？
どうやって治すんですか？
治癒力云々以前に死んでるのに治癒力とかあるんですか？どうなんですか？

「何故に逆ギレ気味さ。キレられる意味がわからんよ。てかマジどーすんのコレ？」

まぁ仕方ないと思って頑張ってください。

「なんかついてったらまた蹴っ飛ばされそうだな」

……
どうか、ご無事で……

「既におせぇよ」

ＳＩＤＥ　ジル

「っと……かなり軽々吹っ飛んでいったけど、帰って来ないな」

「先輩蹴りの威力高すぎませんか～？」

ゾンビ達が仲間に起きた惨事に恐れ、レベッカに纏わり付いていた。

「うわ、うざ……ってかあんたの方が質悪いじゃん。犬神家よ？犬神家」

そういえば地上でやってましたねぇ～

「顔面消し飛んでたじゃん」

「あれは先輩が楽なようにと～テヘッ☆」

「ちっ、ゾンビを仲間につけやがったか……。まぁ、それはいいんだけどアイツは？」

「先輩気づいてないんですか？」

レベッカ達の言葉にジルは1度レベッカ達を見る。
レベッカ達は揃って同じ方向を指差していた。

「私の足元？」

ジルの視線がゆっくり下におちていく。

「あっ、居たの？」

ジルの視線の先には、匍匐姿勢のまま片手を挙げて存在を少しでもアピールするゾンビ2が居た。

「あんた何ではいつくばってんの？」

ジルが問い掛けるとゾンビ2は手に持っていた署名帳にボールペンを走らせる。

「えと……私に蹴り飛ばされて背骨がポッキリ……うん、私のせい

か」

そういうとジルは屈み、ゾンビ2を痛々しい目で見つめた。

「ごめん……ゾンビ2……私のせいなんだし……責任は取るよ」

ジルはゾンビ2の腰辺りに手を置き、摩るように手を動かす。

「先輩……」

レベッカはゾンビ達と共に2人のゆく末を見守っていた。

「ここだな」

ジルの手に一気に力が入る。

何かがへしゃげる音の後、ゾンビ2の頭が地を打った。

「あり？」

ジルはどうも不思議そうで、首を捻りながら唸っている。

「あの～先輩？」

レベッカは恐る恐る声をかける。

「ねぇレベッカ～腰痛の直し方ってどうだっけ？」

「え？先輩？腰痛？」

レベッカは頭で整理しようとするも紐を解くのに少し時間を要した。

「だって私が蹴り飛ばしたから腰が痛くなったんでしょ？」

あの～

ジルさん……腰痛通り越して、背骨ポッキリ逝ったんですが～……

「背骨ポッキリって変な方向に曲がって音がしたんじゃないの？」

「先輩……背骨ポッキリってのは背骨が折れたって意味ですよ」

いつのまにかゾンビ2の腰を摩っていたレベッカが呟いた。

「じゃぁ私の勘違い……」

ジルは膝をついたまま地面を叩いた。

「ゾンビ2～～あんたの事は忘れないからねぇ～～」

ジルの言ってる事に頭の中でツッコミを入れつつ、白い目で見守る。

するとジルは立ち上がり、レベッカ達に向き直った。

「よしゾンビ2の弔いも終わったし、次の報告聞こうか」

一同は一斉に肩を落とす。

「先輩～それは流石にあんまりじゃ～？」

ゾンビ達は同志を見て、泣きながらレベッカに纏わり付く。

「そうかなぁ？元から死んでんだし、いいじゃん？」

そんな会話の中足元に倒れ込んだゾンビ2が息を吹き返した。

ＳＩＤＥ　ゾンビ2

「ゴフッ、えらいめにおうたわ～」

あの～ゾンビ2さん？
口調かわってません？

「あぁ～ええねんええねん、本調子ちゃうだけやから」

そうなんですか
にしてもよく生きてらっしゃいましたね

「それがわっちの底力ばい」

どんどん口調かわってるな……
大丈夫なのか……

「とりまわっちが見つけた事はこんだけやっしゃ」

ボールペンを走らせ、字を書き連ねていく。

ＳＩＤＥ　ジル達

「暗証番号の部屋は薬品庫。奥の赤い扉は内鍵で開かなかった。手前の角の部屋は個室だが、小さな書斎等があったため支配人的なのが住んでいたっぽい。か……そういやレベッカって」

「はい～まさしく私の出番ですね～」

「よかったわ～私薬品弱くてねぇ～実験で同僚の手焼け爛れさせたりしちゃってトラウマに……」

「そんなシュールな事今言わないで下さいよ。こっちも失敗した時の事考えちゃうじゃないですか」

「ごめんごめん。とにかくその薬品庫と角の部屋ね」

「はい。さっさとこんなしんどいとこは出ましょう～」

Ｎｅｘｔ　Ｔｏ　Ｓｔｏｒｙ　ｓｅｑｕｅｌ

## お嬢達が帰ってきたZE～～☆☆　By ゾンビ～S（後書き）

さぁどうだった？

何故か書いててしっくりきた

やっぱゾンビいないとこのストーリーなりたたないわ……

てな訳で次は後編で会いましょ～う

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0147r/

---

バイオハザード？まぁんなタイトル聞き飽きたぁ～これからはゾンビが主役だ

2012年1月14日00時45分発行